

女性の社会的役割態度と職業自己イメージ*

—尺度の構成と比較分析—

若林 満 鹿内 啓子 後藤 宗理¹⁾

自己概念は、古くから職業における人間行動に関連づけて論じられてきた。職業と「自己概念」(self concept)を関連づける一つの立場は、職業経験が自己概念の形成や発展にどのような影響を与えるか、という観点を強調している。Super & Bohn (1970)によると、この点を最初に論じたのはCarter (1940)であるという。Carter は人が興味や適性を感じている職業において十分な報酬をうけると、彼はその職業に自己を同一化させることによって、自己についての特定の概念をより強化させることを強調した。またSuper (1957)自身もこの観点を受け継ぎ、職業発達が職業活動をつうじての、自己概念の「実現」(implementation)に他ならないという立場をとっている。Super がEriksonの自我同一性の発達段階理論にならって、個人のキャリア発達を職業自己概念の発達段階として論じていることは、よく知られている。第1の段階は、重要な他者との同一視をつうじて職業自己概念が発達する「成長段階」(14才ぐらいまで)である。第2は奉仕やパート労働などをつうじ、自己吟味や職業探究が行なわれる「探索段階」(15～24才)、そして第3が自分の分野が見いだされ、そこで永続的な基盤を築くための努力がなされる「確立段階」(25～44才)である。この後には「維持段階」(45～64才)と「下降段階」(65才以後)が続く。

個人の側からみれば、以上の過程は自己概念の形成、具体的職業への自己概念の翻訳ないしは同一化、その職業での自己概念の実現という3つの局面の展開を意味している。この過程は変化をも含む。すなわち新しい自己概念が芽ばえ、新しい職業が探索・選択され、今までと

は異なった自己概念がパーソナリティの一部として形成・獲得されていく過程である。逆に昇進とか移動にともなう職業活動(役割)の質的变化は、既存の自己概念との葛藤を生み出し、その変容をせまるかもしれない。より長期的には、個人の職業上の発展(キャリア発達)にともなう環境変化に対し、自己概念はその一部を創造したり破壊したりする作業をつうじて、常に適応をせまられていることになる。このように個人の発達をキャリア発達としてとらえ、その中核に自己概念と職業活動とのダイナミックな相互依存関係を想定しているSuperの職業心理学の考え方は、職業行動に係わる多様な問題意識を統合しうる、有効な概念的用具とみなすことができる。

本研究の目的は、女性の職業行動(職業選択と職業生活での適応や発達)や職業意識・勤労意欲にかかわる問題を、自己概念の形成や発達という観点から理解するための、基礎的作業を行うことに向けられている。女性の自己概念の特質については、従来から性役割認知の問題として論じられてきた。このアプローチでは、G. H. Meadらの社会的自己に関する理論をふまえ、社会から期待されている女性役割の特徴が、男性役割のそれとの対比で究明されてきている(柏木1972, 1974; 伊藤, 1978)。例えば柏木は、男性と女性に望まれる特質の違いは、知性、従順・美、行動力という3つの因子から論ずることができ、知性と行動力は男性役割に関する因子、従順と美は女性役割に関する因子であると論じている。しかし因子の内容をみると、第1因子(知性)は頭のよい・学歴のある・理性的・政治に関心のある、第2因子(従順・美)は従順な・謙遜な・男性に依存的・容貌の美しい、第3因子(行動力)は経済力のある・意志強固な・活発ななど、青年期における性役割の特徴は必ずしも体系的に把握されていない。その原因は不適切な特性語の使用(例えば背が高い・学歴のある・女性をリード・容貌の美しいなど)に一部帰せられよう。一方柏木(1974)は、自己(青年)自身の性役割観と、社会の期待する性役割認知との差違の分析結果から、男子では早くから男性役割期待と女性役割期待が対照的に分化し、青年自身

* 本研究のためのデータ処理は、名古屋大学大型計算機センターのFACOM M-200によって行なわれた。

本研究のデータは、一部「働く婦人に関する意識調査」に依存している。データ利用に関し、愛知県婦人労働サービスセンター、および職場適応研究会に感謝いたします。

1) 名古屋市立保育短期大学

の自己役割認知がこの分化と整合的に形成されるが、女子においては役割期待の認知と自己の性役割の認知の間にズレや葛藤が存在している事実を報告している。

伊藤（1978）は、女性役割・男性役割にかかわる特性語を整理し、これらの特性の女性および男性にとっての重要度評定の結果に因子分析をほどこした。分析の結果は、男子の評定からは男性らしさの Masculinity 因子と、両性に共通な Humanity 因子の2つが、女性の評定からは女性らしさの Femininity 因子と、やはり Humanity 因子の2つが導出された。男性らしさの M 因子は、冒険心に富んだ・たくましい・大胆などの形容詞、女性らしさの F 因子は、かわいい・優雅な・色気のあるなどの形容詞、中性的な H 因子は、忍耐強い・心の広い・頭の良いなどの形容詞によって特徴づけられていた。この結果に基づき伊藤は性役割認知の次元は、結局 M-H-F の3因子に要約できるものとし、各々の次元のスケール化とそれを用いての性役割評価に関する広範な比較分析を行った。結論として、①男性役割は女性役割よりも高い評価が与えられており、男性役割の優位性が確認されたが、絶対的基準からいえば Humanity に最も高い価値が付与されていた。②男性役割期待は社会的望ましさと一致するが、女性役割期待はそうではなく、多くの役割葛藤を含んでいる。③女性のタイプは F 型・M 型・H 型に分類でき、各々の型は学歴や職業、年齢などの要因と一貫した関連を有している。

性役割に関する研究の結果は、自己概念の測定に係わる基本的次元を示唆する点において重要である。例えば伊藤の研究は、性差を問わず Humanity という側面が自己像の認知や評価にとって最も重要であることを示唆している。また、男性的な女性は多分 Masculinity の次元で高い得点を示し、女性的な男性は相対的に高い Femininity 得点を示すことなどが予想される。しかしこれらの次元は女性と男性のキャリア発達とどのように関連するのだろうか。例えば女子学生の自己概念は、現実の職業生活での試練に晒された場合、どのような変化を生み出すのだろうか。加えて、女性が職業人としてのキャリア形成に自己を同一化させている場合、良妻賢母の家庭婦人のキャリアへの同一化の場合に比し、多分に異なる自己概念が存在することが考えられる。いずれにしろ、これら女性の自己概念は、男性の職業人としての自己イメージとどのように異なるのだろうか。最後に、女性のキャリア発達（それがどのようなものであろうと）においても、職業心理学が想定しているような諸段階が存在するのだろうか。

以上のような問に対しては、職業自己概念の形成とその発達という観点からの研究がより適切である。逆に性

役割認知のアプローチには、いくつかの限界がある。その第1は、測定された性役割認知の個人差をどう説明するかという点である。この認知において、異性間の分散よりも、同性内での分散の方が大きいということは十分ありうる。第2は測定されたいわゆる“性役割”が、現実のどのような社会的役割およびそこでの役割行動と関連を持つのか、という点である。もし両者の間に何らかの関連がないとしたら、性役割とは一体何であろうか。以上と関連して、第3に性役割研究は、実際には文化的・社会的に望ましいとされているステレオタイプの男性像と女性像に焦点を合わせている。しかし、現実には人々がこのステレオタイプをどの程度信じて行動しているかは、別問題と考えなければならない。このような限界を克服する方法の一つは、性役割というような抽象的役割ではなく、より現実的・具体的な社会的役割の一つに自己を投影させ、その投影されたイメージの比較分析をつうじて、女性にとっての自己概念や役割意識を解明していくことである。本研究ではこのような社会的役割として、職業がとりあげられる。大部分の若い女性にとって現在職業人としての自己像を何らかの形で形成することなく、自己のキャリア・アイデンティティを目論むことは、非常に困難であるといえよう。すなわち伝統的な家庭人としての性役割に加え、現在多く女性は、職業人としての役割と自己概念とを形成しようとしているのではないだろうか。さらに、職業人としての自己、という概念を用いることによって男性、勤労青少年、学生、主婦、キャリア・ウーマンなど異質なグループを、現実的な基盤で相互に比較することがはじめて可能となるのである。

I 研究の目的

本研究では、職業という社会的役割における諸個人の自己イメージを評価するための尺度と、女性の社会的役割に対する態度を測定するための尺度の2つを構築することが目的とされている。職業自己イメージの尺度では、性役割認知の諸次元と、対人認知場面での人格評定の諸次元との統合が試みられる。まず、性役割認知の諸次元に関しては、先に紹介した柏木や伊藤の研究が重要な出発点となる。ついで、職業人格認知の諸次元については、大橋ら（1976, 1977, 1978）や林（1977, 1978）の「暗黙裡のパーソナリティ理論」（implicit personality theory）での対人認知の諸次元（例えば、個人的親しみやすさ・社会的望ましさ・力本性の次元、ないし活動性・評価・力強さの次元など）が、有力な方向性を提供している。問題の焦点は、性役割認知次元と対人認知次元を有機的に結合するような特性語のリストをどのようにして発見し、それらを単一の尺度へと構成していくか

という点にある。本研究では職業自己イメージ尺度は、最終的にはSDスケールの形で構築されることになる。

第2の女性の社会的役割尺度は、久世ら(1977, 1978, 1980)の社会的態度に関する一連の研究や、他の性役割態度に関する研究(東, 1979; Gump, 1972)が出発点となっている。この尺度の意図するところは、さまざまな社会的役割(主婦, 職業人, 市民, 地域人, 女性個人など)における女性の生き方・取り組み方の積極性ないしは革新性の度合を明らかにする点にある。したがってこの尺度においては、抽象的な性役割ではなく、具体的な社会的役割とそこでの女性のあり方が提示され、それらに対する態度が女性の側と男性の側から対比的に評定されることになる。この領域はGumpらが「性役割態度(sex-role attitudes)」と呼んでいる研究分野に属するが、本研究の目的の一つは先の女性の職業自己概念と、この性役割態度との関係を明らかにすることにある。

本研究では横断的比較をつうじて、職業自己概念尺度と社会的役割態度尺度の妥当性が検討される。比較のサンプルとして、女性のグループでは看護系・保育系・人文系を含む女子短大生と、専門職(看護婦と保母)と事務・販売職(銀行と百貨店)に従事する勤労婦人の2グループが、男性グループでは男子大学生と既婚勤労婦人の配偶者の2グループが求められた。尺度の構成の手続きとして、まず全グループ(合計1405名)に基づき因子分析を行い、各因子を構成する中核的項目が選定された。次いでこれらの項目の平均得点として構成される合成尺度(以下因子尺度と呼ぶ)の信頼性を、各下位サンプルごとに検討するという方法がとられた。本研究の目的を、以下にもう少し詳しく論じてみよう。

1. 社会的役割の諸領域と女性の役割態度

Gumpは性役割に対する伝統的な態度と進歩的な態度に係わる尺度を構成し、これらがアメリカの女子大学生(4年生)において、個人の達成動機や自己概念の強さとどのように関連しているかを調べた。まず性役割態度項目の因子分析の結果は、次の7つの因子の存在を明らかにした。第I因子: 伝統的役割から派生するアイデンティティ。第II因子: 女性の役割は服従的である。第III因子: 個人主義的な達成と満足への欲求。第IV因子: 家庭志向と子供への義務の強調。第V因子: 伝統的役割は個人的な欲求充足をなながしか放棄することを意味する。第VI因子: 自律感覚と高度な独立性。第VII因子: 完全な欲求充足のためには家庭だけでは不十分。これら7因子の内、I・II・IV因子が「他者志向(other orientation)」を表わし、III・V・VI・VIIが「自己志向(self

orientation)」を表わすものと解釈され、この二分法にしたがって性役割態度と、他の尺度との関係が分析された。分析の結果、①アメリカにおける中産階級の若い女性の性役割観は、1950年代と比べると中庸的で他者志向とも自己志向ともいえなくなっている。②他者志向・自己志向・中庸群の間には、夫を捜すことを目的とする度合に有意な差があった。③自己志向群は他者志向群よりもはるかに多くが大学院進学や学位取得計画を持っていた。逆に他者志向群は、夫を捜すことを目的とする度合がより強かった。④別に自我強度を測定する尺度が用いられたが、自我強度は伝統主義や他者志向性とは逆の相関を示した。すなわち自我強度の高得点群は明確な卒業後の計画、大学院進学計画、達成志向と結婚・家庭の両方に対する強い関心、恋人や父親への非依存性などによって特徴づけられていた。

Gumpの性役割態度スケールでは、性役割は家庭中心の伝統的女性役割観が、女性個人としての自由なキャリア形成への欲求と対比させられている。この点から考えると他者志向・自己志向という性役割の次元は、アメリカ文化(正確には1970年代前半のアメリカ女子大生の下位文化)の中で解釈された性役割における伝統主義と進歩主義、と解釈することが許されよう。

久世らは、中学生と高校生の男子・女子を対象に社会的態度に関する縦断的研究を行ない、保守的・革新的・大衆社会的という3つの社会的態度次元を明らかにした。この尺度は39の項目からなり、それぞれ13項目が上記3つの態度次元を構成するよう配置されている。例えば、保守的態度は「国の政治は政治家にまかせた方がよい」「女が政治などに口だしすべきではない」「結婚は家柄を重んじなければならない」などの項目からなっている。これに対し革新的態度は、「個人の自由は尊重すべきである」「正しいことであれば世間体など気にすべきではない」「いくら恩義のある人でも筋道のとらない頼みごととは断った方がよい」など、また大衆社会的態度は「流行語などよく知らないとはずかしい」「労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない」「みんなが見ているテレビ番組を見ていないととりのこされる気がする」などの項目から構成されている。縦断的研究の結果に基づき、久世ら(1980)は次のように結論している。①保守的態度と大衆社会的態度の間には正の相関関係が、そしてこの両者と革新的態度の間には負の相関関係が存在している。②社会的態度の再テスト安定性は大衆社会的態度で男女共通して高く、女子においては保守的態度・革新的態度も高い安定性を示している。③新たな因子分析の結果「大衆社会的態度」「保守的-革新的態度」「権威主義的-政治的無関心の態度」「伝統的価値

観」の4因子の存在が明らかとなった。しかし革新的態度は、他の諸側面と予想されるような明瞭な負の相関関係を示していない。④社会的態度は中学・高校の6年間をつうじて安定した構造となって行く。

Gumpの研究は性役割態度における他者志向(伝統主義)と自己志向(進歩主義)の2側面を明らかにした。前者は他者(社会)が課する伝統的な女性役割期待への同調傾向を意味し、他方後者は個人的な自己のキャリア形成プログラムが要請する社会的役割(大学院生とか職業人、一個人としての自己、自分なりの家庭人のイメージなど)への用意を意味している。しかし分析の結果は7つもの因子を生み出し、結果としてこれらは、出発点の伝統主義—進歩主義の側面と合致するよう再統合されねばならなかった。この因子構造の複雑性は、おそらく項目選択の恣意性に起因すると思われる。質問項目の開発にあたっては、女性の社会的役割領域(家庭・職業・政治文化・地域社会など)の明確化と、各領域ごとの役割次元(伝統主義—進歩主義)が、バランスよく代表される必要がある。

同様に、久世らの研究においても社会的態度の領域(社会や政治・伝統価値・性役割・青少年のサブカルチャーなど)と、役割次元(多分伝統的と革新的の2次元であると思われる)の不明確化が、社会的態度における因子的構造の複雑性をもたらしているものと思われる。またGumpの研究では、性役割態度尺度の有効性は、関連する他の尺度やデータ(自我強度、男性との関係の質、学問・就職・研究生活に対する態度など)との一貫した有意な関係のもとで検討されている。しかし久世らの研究では、社会的態度の諸次元が他の尺度やデータといかなる意味ある関係を有しているのかは、一切知られていない。

以上のまとめとして、本研究の課題の一つである女性の社会的役割態度スケールの構成にあたっては、次の3点が注意される必要があることが指摘される。①女性の社会的役割領域として、いくつかの主要な領域が選定される必要(少なくとも家庭と職業領域は不可欠)がある。②各領域でいくつかの役割次元(少なくとも伝統主義と進歩主義)を代表する質問項目が準備される必要がある。③女性の社会的役割態度は、他の尺度(例えば職業自己概念や職場適応などの尺度)と有意な関連を示す必要がある。なぜなら①②の条件から生まれる役割態度尺度は、伝統的家庭人の役割や進歩的職業人の役割に係わる因子を含んでいるはずだからである。

2. 女性の職業自己概念と性役割

性役割研究は、女性の自己概念を「女らしさ(Fem-

inity)」と規定してきた。この対極には、対概念として「男らしさ(Masculinity)」があり、性役割研究は実はこの両概念に基づく個人の「性度」の測定と、その比較であると極論することができよう(東, 1979)。性度の測度としていろいろなM—Fテストが開発されてきた。著名なものとしては、CPIの内からMasculinity—Feminityに関連する項目だけを選び出し尺度化したGough(1957)のM—F尺度があげられる。この尺度では男性度・女性度は一次元上での対極と考えられている。全体は58項目からなり、内36項目がF項目(例えば「私は政治的指導者のタイプではない」「私は図書館員のような仕事が好きだ」「私は見知らぬところに行くときはおびやかされるような気がする」など)、22項目がM項目(例えば「私は社会で重要な人物になりたい」「私は機械の雑誌が好きだ」「私はパーティや他のにぎやかな面白い集まりに行くのが好きだ」など)となっている。スケールはYes・Noの2件法で、F項目にYes、M項目にNoと答えた場合各1点が与えられる。したがって最高は58点で女らしさの極限を表わし、最低は0点で男らしさの極限を意味する。この尺度の上でアメリカ男子学生の場合、平均33.2(標準偏差4.9)であるという。

Goughの尺度では、性度は一次元で定義されており、女らしさが増大すれば自動的に男らしさが減少する、ないしはその逆の仕組みとなっている。これに対して同じCPIの項目を用いながら、Baucom(1976)はM次元とF次元を独立的な2次元と考え、Goughとは異なるM—F尺度を開発している。BaucomスケールではM尺度は54項目から構成され、最高54点最低0点のレンジでM得点が与えられる。同様にF尺度は42項目からなり、42点から0点のレンジでF得点が計算される。したがってBaucomの尺度では、ある個人はM得点もF得点ともに高く、別の個人では両得点がともに低いということが生じうる。また女らしさ・男らしさはそれぞれ、F得点が高くM得点が低い場合・F得点が低くM得点が高い場合、と2次的に解釈されることになる。以上の性役割におけるM的特性とF的特性の関係づけに関する、次元論的議論を要約すれば、図1のようになろう。

図1はM—F特性を2次元と解釈した場合、Masculinityの反対はFeminityでなく弱い、ないしはゼロのMasculinityであり、Feminityの反対はMasculinityでなく弱い、ないしはゼロのFeminityであることを示している。図に示したとおり、上記2次元の直交はMF, Mf, mF, mfという4つの性役割タイプを作り出す。Heilbrun(1981)は、これらの4タイプをそれぞれ「両性的(androgynous)」、「男性的(masculine)」、「女性的(feminine)」、「未分化的(undif-

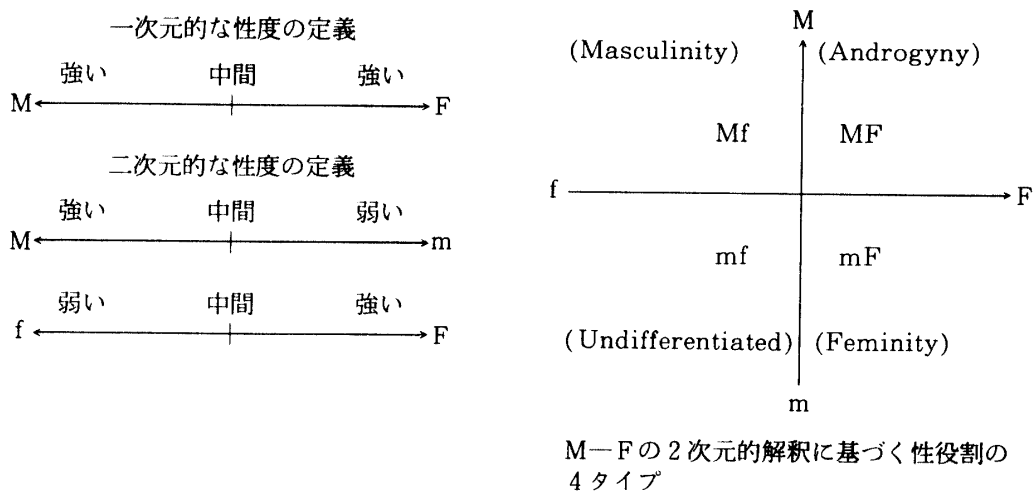


図1 Masculinity-Femininityの次元と性役割のタイプ分類

表1 BemのMasculinity - Femininityスケール*

Masculinity スケール項目	Femininity スケール項目
リーダーとして行動する	愛情深い
攻撃的	愉快的
野心的	子供らしい
分析的	同情深い
断定的	かたい言葉を使わない
競技者的	傷ついた感情を慰めるのに熱心
競争的	女性らしい
自己の利益を守る	悦ばせやすい
支配的	温和な
力強い	騙され易い
リーダーシップ能力のある	子供を愛する
独立的	誠実な
個人主義的	他者の欲求に敏感
容易に意思決定を行う	内気な
男らしい	ソフトに話す
自力本願	同情心のある
自惚の強い	優しい
強いパーソナリティ	理解力のある
一定の立場をとる用意のある	温かい
リスクをとる用意のある	従順な

* S.L.Bem, The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 1974 42, 155-162 より訳出。

ferentiated)」と名づけている。

以上のCPIに基づく性役割尺度に対し、Bem(1974)は独自のM-F特性項目を用いてMasculinityとFemininityの尺度化を試みた。表1に示したごとく、Bemの尺度においては、MとFは形容詞を中心としたごく短

い20の特性語から構成されている。そして回答者はこれらの性役割特性が、どの程度自己の行動を描写するものであるかについて、7点法で答える方式となっている。Bem尺度の特性語は、社会的望ましさの観点から選定されている。すなわちBemは、大学生を用い多くの特

性用語を、男性にとっての望ましさと、女性にとっての望ましさを2つの観点から評定させた。そして2つの評定の間で有意差を示した用語がリストアップされ、その中から表1に示した40の特性語が最終的に採択された。加えて、これらの言葉はすべて正の価値を示す特性（アメリカ文化のコンテキストの中で）であることも、注意しておく必要がある。

以上は女性にとっての自己概念を、性役割の femininity に焦点を当て測定しようとする試みであると考えられる。このアプローチには、いくつかの重要な問題点が存在している。第1点はいうまでもなく、femininity — masculinity は1次元か2次元かという問題である。独立2次元と解釈する場合、Baucom の尺度にしろ Bem の尺度にしろ、M得点とF得点は互いに無相関でなければならない。より正確にいうなら、独立2次元と仮定した場合は、M得点とF得点が基本的に相関ゼロとなるよう、masculinity の特性と femininity の特性用語を注意深く選定して、M尺度とF尺度を構成しなければならない。実際、Bemの場合は $r = -.14$ から $+.11$ で、基本的にはM特性とF特性は相関ゼロ、Baucom スケールの場合でも両特性の間には有意な相関関係は存在していない。しかしSpenceら(1975)は、Bemタイプの特性語尺度において、M特性とF特性の間に $r = +.14$ から $+.47$ の有意な正の相関を見出ししている。以上の3尺度においては、MとFはサンプルによってマイナスからプラスの間でゆるい相関を示すものの、両特性間の独立性の仮定は基本的には維持されているものと考えられる。

第2点は図1に示したように、M得点・F得点がともに高いMF型や、その逆のmf型をどのように位置づけるかという問題である。Bemの尺度においては、おのおのの特性はどの程度自己の行動を記述しているか、という観点から回答が求められている。ということは、両性的なMFタイプの間は、男女を問わず男らしさと女らしさの両特性を、高度に使い分けて行動している、達者で行動レパートリーの広い人間ということになる。逆に未分化のmf型では、行動の特性に何らきわだったところがないということになる。そしてMf型とmF型はそれぞれ純粋型の男らしさ・女らしさの行動パターンを示していると考えられる。両性的傾向はM特性とF特性をともに強く持ち、かつ両者がバランスしている状態を意味している。Heilbrunはこの「強さ」と「バランス」を同時に表現する指標として、 $[(M+F) - |M-F|]$ を考えている。いずれにしても上記4つの型は、個人の行動パターンの特性、ないしは自己行動記述から得られた個人のパーソナリティ類型を意味している。

そしてこれらの類型が生まれる根拠は、男性女性を問わず人間の内にはMの特性とFの特性が共存している、という性役割特性の独立性の仮定に存している。

第3点として、masculinity — femininity というような記述的・包括的概念が、一体どのような行動科学的な分析概念へと、翻訳可能なのかという問題があげられる。Heilbrunによれば、性役割研究者の間ではmasculinity — femininity の概念内容は、それぞれParsons & Bales (1955)の主張している「道具的志向」(instrumental orientation)と「表出的志向」(expressive orientation)に還元できるという点で一致しているという。ParsonsとBalesによれば、道具的志向とは個人が自分の行動を、個人的な目標の実現という観点のみから選択する傾向を意味している。一方、表出的志向は対人関係における良好な人間関係維持と、そこでの満足感の充足に行動選択の基準が置かれている。したがって道具的志向は、人間関係満足を犠牲にしても自己の目標を達成しようとする行動特性(すなわちmasculinity)を、逆に表出的志向は自己の目標達成よりも、対人関係における安定と満足を優先させる行動特性(すなわちfemininity)を意味することになる。以上の説明から明らかなおお、ParsonsとBalesにあっては上記2志向は相互に排他的である。ということは、道具的—表出的という対概念は一連続体上での対極を意味し、独立した2次元とは考えられていないということになろう。いずれにしろ、性役割研究が「正しく」は、道具的志向と表出的志向における性差の研究であるとするならば、masculinity — femininity とか男らしさ—女らしさ、というような曖昧な概念を保持し続ける理由はどこにあるのであろうか。

上記に関連し第4点として、性役割意識の発達と、その背後にある「性役割のステレオタイプ」(stereotyped sex roles)と「性別化」(sex-typing)の問題があげられる。文化—パーソナリティ理論(Mead, 1949)や社会的自己の発達に関する理論(Cooley, 1909; Mead, 1934)によれば、男らしさ—女らしさの特性は文化的・社会的に学習され、個人のパーソナリティへと統合される。したがって、当該社会でのステレオタイプの厳格さおよび性別化圧力の強さは、学習された男らしさ—女らしさの特性のパターンを決定することになる。性役割ステレオタイプの研究(柏木, 1967, 1972, 1974; 伊藤, 1978)では、一連の特性が男性と女性のそれぞれに対して、望ましくないしは期待されていると信じられている度合が、多様な被調査者の目をつうじて評定される。そして、男性に期待される度合と女性に期待される度合との間で、有意な差を示した特性語が、それぞれ男

らしさと女らしさのステレオタイプとして確定される。表1で紹介した Bem の masculinity — femininity スケールも、以上のような手続きの結果として構築されたものである。また伊藤は日本で学生と社会人のサンプルに基づき、masculinity のステレオタイプとして冒険心に富んだ・たくましい・大胆な・指導力のある・信念を持った・頼りがいのある・行動力のある・自己主張のできる・意志の強い・決断力のあるの10特性を、一方 femininity のステレオタイプとしてかわいい・優雅な・色気のある・献身的な・愛嬌のある・言葉使いのていねいな・繊細な・従順な・静かな・おしゃれなの10特性を確定している。以上のアプローチは、性役割のステレオタイプ、ないしは文化的・社会的価値として認知されている性役割期待、に照らして自己概念を測定しようとする試みである。この場合、役割期待内容を定義する特性語は、すべて正の価値を持つものから構成されるのが普通である。それだけに、これらの特性語を用いての自己概念の測定においては、社会的望ましさの評定バイアスが一挙に増幅される心配がある。特にM得点・F得点ともに高い場合、それが MF 両性型を意味するのか、典型的な社会的望ましさのバイアス傾向を意味するのか、判断の根拠は何もない。

最後に第5点として、対人認知の構造と性役割特性の次元との関係が吟味されねばならない。従来、他者のパーソナリティの認知における次元の問題は、SD (Semantic Differential) 法を用いた認知的意味空間の構造として究明されてきた (Osgood et al., 1957)。このアプローチは、対人認知における他者のパーソナリティの意味次元として、「評価 (Evaluation)」、「力量性 (Potency)」、「活動性 (Activity)」の3つを明らかにしている。これらの次元は認知 (評定) の対象となる人格 (概念) の種類 (自己、特定の他者、架空の人物、集合的人格など) と、人格評定のための特性語の選び方によって多少の変動はあるものの、対人認知の因子的構造には上記の3次元が関与しているのが一般的である。例えば林 (1978) は、相貌と性格の仮定された関連性の研究で、マンガの主人公の性格認知の次元として個人的親しみやすさ (評価) ・力本性 (活動性+力量性) ・社会的望ましさ (評価) の3次元を得ている。同様に大橋ら (1978) の女子大学生の対人認知に関する研究では、対人認知の因子構造は活動性・親近性・魅力性・誠実性の4次元となっている。Wakabayashi ら (1977) および南ら (1979) の大学生における自己像の認知においても、評判 (評価) ・活動性の社会規範・社会的受容性・力量性の4次元が報告されている。さて問題は、SD法でとらえた性役割像 (例えば期待される女性・男性の

イメージ) の因子的構造次元はいかなるものであるか、という点である。より具体的にいえば、性役割認知における masculinity—femininity の次元と、評価・力量性・活動性の次元とは一体いかなる関係にあるのかということである。不思議なことに、性役割研究においてこの種の疑問は、従来まったく問題とされてこなかった。

3. 研究の焦点

まとめとして、本研究では女性の社会的役割態度と、職業自己概念の測定のための尺度の作成が試みられる。役割態度スケールでは、女性が社会において果すべき現実の役割に焦点が当てられ、これらの役割への関与のし方が伝統主義—進歩主義という次元から問題とされることになる。女性にとって中心的な社会的役割領域が、家庭・職業・社会生活 (例えば市民として) の3つにあることは疑い得ないだろう。本研究ではこれらの役割に対する伝統的アプローチと、進歩的ないしは自己志向的アプローチが、一連のステートメントとして提示され、これらに対する賛成—反対の程度が測定されることになる。これに対し職業自己概念尺度においては、職業人としての自己イメージが SD 法の形式に従って測定される。先にも述べたとおり、この尺度の構成のためには性役割の中心次元である masculinity — femininity と、対人認知の基本的構造次元である評価・力量性・活動性の3側面とが、一連の特性語の対 (形容詞対) によって適切に代表される必要がある。以上のような複雑な機能を果たしうる可能性を持つ形容詞対を選択することは、容易ではない。このために、特性形容詞対選定のための予備調査が行なわれた。この結果は次に述べる。

本研究の最終的な目的は、構成された社会的役割態度尺度と職業自己概念尺度との関係を検討することである。このための最も基本的な仮説は、職業人としての自己認知における力量性の次元は、多分 masculinity — femininity の次元と深く関わっているだろうという点である。もしそうなら職業自己イメージにおける力量性次元は、職業・家庭・政治・社会といった領域における、女性の進歩的・積極的な役割態度と有意な関係を示すはずである。また本研究では、多数の働く女性がサンプルの一部を構成している。働く女性グループでは、第3の尺度として職場適応が測定されている。したがってこのグループでは、職業自己概念と社会的役割態度の両尺度の妥当性を、働く女性の職場適応に照らして検討することが可能となる。

II 予備調査とその結果

SD法の形式に従った職業自己イメージ尺度構築の前

段階として、職業自己の特性記述のための特性形容詞対の選定作業が行なわれた。なお、この作業の内容と結果の詳しい報告については、後藤（1981）を参照されたい。調査に先立って、Bem（1974）、大橋ら（1976、1977、1978）、林（1978）、柏木（1972、1974）、伊藤（1978）、加藤（1977）、Wakabayashi et al.

（1977）の研究を参考に、パーソナリティの記述に係わる特性語の収集が行なわれた。そして、おびたしい数の形容詞群の中から、最終的に100個のパーソナリティ特性に関する形容詞が選出された。選択の基準として、次の4点が考慮された。①行動（特に職業行動）記述的な特性語であること。したがって柏木（1972）が用いたような「背が高い」「経済力のある」「学歴のある」「容貌の美しい」などの、外見的で非行動的特性は除外された。②特に、行動における道具的志向と表出的志向に係わる形容詞は積極的に選択された。例えば、意志強固な・外向的・理性的とか、素直な・繊細な・家庭的といった形容詞である。③正の価値を有する形容詞とともに、負の価値（日本文化のコンテクストで）を有する形容詞も選択された。例えば、雑な・粗野な・不誠実な・弱いなどの形容詞がそれである。④上記3つの条件を満たす限り、ある形容詞の対極となる特性語も選ばれた。例えば「理性的」に対して「感情的」、「外向的」に対して「内向的」、「意志強固な」に対して「意志薄弱な」などである。

以上の基準で選ばれた100個の特性形容詞は、次のステップとして実際の調査をつうじ、ステレオタイプの性役割特性と関係づけられた。調査においては、次のような教示が与えられた。「以下に人間の性質や状態をあらわす項目があげてあります。それらの項目を注意深く読んで、それぞれの項目が男性に多くみられる性質のものか、それとも女性に多くみられるものかを答えて下さい。」回答者は、「男性に多くみられる」「どちらともいえない」「女性に多くみられる」の3件法で、100個の形容詞に評定を与えた。被調査者は男女大学生329名で内訳は、男子166名（名古屋大学1年生60名、名城大学2年生76名、大同工業大学2年生30名）、女子163名（名古屋大学1年生14名、南山短期大学2年生30名、名古屋市立保育短期大学1、2年生119名）となっている。表2は100個の形容詞と、それらが「男性に多くみられる」「女性に多くみられる」「どちらともいえない」のいずれかとして支持されたパーセントを示している。

加えて表2では、ある形容詞が「男性に多くみられる」ものとして50パーセント以上の支持を得た場合、それらは「男性」形容詞として分類されている。同様に「女性に多くみられる」特性として50パーセント以上の支持が

あった場合は「女性」形容詞、「どちらともいえない」が50パーセント以上であった場合は「中性」形容詞として分類された。「あいまいな」形容詞は、どこといってきわだった支持が得られず、前記3つのカテゴリーのいずれにも分類できなかった形容詞群である。なお支持率は、同一形容詞内部で男子学生と女子学生の間で、若干の差異を示していた。しかし支持率のパターンについては、男女間で基本的な一致が存在していたため、最終的な支持率は表2に示したとおり、男女こみのデータに基づいて計算された。なお、男女別の支持率については、後藤（1981）を参照のこと。表2から明らかなおとあり、「男性」形容詞と「女性」形容詞は、それぞれステレオタイプ化された masculinity と femininity の特性に対応している。いうまでもなく表2のリストは、Bemや伊藤らの特性語表とよく一致している。「中性」形容詞は、伊藤が Humanity の因子と呼んだ内容にあたり、男らしさ・女らしさのいずれかの特性とされるよりは、両性に共通の、いわば「人間らしさ」の特性として支持されたものである。また、曖昧性の強い形容詞として分類された特性の中にも、強いて分類すれば「男性」「女性」「中性」のいずれかに分類可能な形容詞もいくつかある。これらの支持率情報の吟味に基づき、・印をほどこした形容詞が、最終的な形容詞対の尺度を構成すべく選択された。

形容詞対作成のための特性語の選択は、次の2つの観点から行なわれた。第1は、男性形容詞の1つと、意味上その対極にあると思われる女性形容詞の1つとをペアで組み合わせ、一個の形容詞対を作ることである。例えば、おしゃべりな—無口な、強い—弱い、家庭的—非家庭的といった形容詞対がこれにあたる。これらのペアは、最終的には7点尺度のSDスケールとして使用される。ということは、本研究では masculinity — femininity の次元は、男性形容詞と女性形容詞の対からなるSDスケールの上で、一次的に定義されていることを意味している。この尺度では、ある人の masculinity のレベルが増大すれば、femininity のレベルは自動的に逆比例して減少することになる。別のいい方をすれば、性役割における「両性型」や「未分化型」の測定は排除されているということである。最終的に20の男性形容詞—女性形容詞の対が作成された（表3参照）が、85パーセントの形容詞は・印の「男性」または「女性」形容詞の内から選ぶことができた。残り15パーセントの形容詞は、基準を若干ゆるめ、「中性」ないし「あいまいな」形容詞群の中からピックアップされた。

第2の選択基準は、中性形容詞は中性形容詞相互の間でペアを作るということである。例えば、頭のよい—

表2 各形容詞のもつ男性度・女性度・中性度と、それに基づく形容詞の分類

「男性」形容詞 (24語)	「女性」形容詞 (25語)	「中性」形容詞 (26語)	「あいまいな」形容詞 (25語)
・たくましい(95・1・4)	・おしゃべりな(1・93・6)	・頭の悪い(2・17・81)	・忍耐のある(49・20・31)
・頼りになる(92・0・8)	・かわいい(1・91・8)	・暗い(13・9・78)	・積極的(46・8・46)
・頼もしい(91・1・8)	・細やかな(1・85・14)	・魅力のない(18・5・77)	・理性的(46・17・37)
・指導力のある(87・1・12)	・感情的(4・84・12)	・不親切な(19・9・72)	・おおらかな(45・15・40)
・決断力のある(87・1・12)	・家庭的(3・81・16)	・不誠実な(19・9・72)	・いきな(45・12・43)
・行動力のある(84・1・15)	・気持ちのこまかい(4・80・16)	・不活発な(3・31・66)	・根気のある(43・22・35)
・冒険心に富んだ(79・5・15)	・おしゃれな(3・79・18)	・非社交的(16・19・65)	・樂觀的(41・21・38)
・視野の広い(78・1・21)	・繊細な(6・77・17)	・ふまじめな(32・5・63)	・しっかりした(41・15・44)
・野心のある(78・3・19)	・優雅な(6・76・18)	・頭のよい(35・3・62)	・率直な(41・13・46)
・粗野な(74・5・22)	・献身的(9・74・17)	・忍耐のない(6・31・62)	・外向的(40・12・48)
・雑な(72・4・24)	・線の細い(2・73・24)	・冷たい(15・24・61)	・反抗的(35・20・44)
・責任感のある(71・2・26)	・依存 的(4・72・24)	・責任感のない(4・34・61)	・慎重な(35・25・40)
・強い(69・4・26)	・わがままな(5・72・23)	・あかぬけした(9・31・60)	・のんきな(31・26・43)
・おおまかな(68・3・28)	・派手な(2・71・27)	・親切な(7・33・60)	・あきっぱい(28・26・46)
・線の太い(68・6・26)	・従順な(4・70・26)	・誠実な(30・12・57)	・かわいくない(26・26・48)
・意志強固な(68・8・24)	・うるさい(8・70・19)	・意志薄弱な(7・35・57)	・かわいげない(25・32・43)
・自信のある(66・4・30)	・愛嬌のある(8・70・22)	・心の狭い(7・37・56)	・こせこせした(23・37・40)
・心の広い(66・5・29)	・弱い(3・66・31)	・地味な(34・11・54)	・ひ弱な(20・39・41)
・自主的(60・2・38)	・決断力のない(5・63・31)	・活発な(35・11・54)	・軽率な(18・36・46)
・非家庭的(57・4・39)	・野心のない(5・63・32)	・社交的(26・21・53)	・静かな(17・43・40)
・無口な(54・8・38)	・指導力のない(5・60・35)	・頼りにならない(7・39・53)	・暖かい(16・39・45)
・大胆な(53・23・24)	・視野の狭い(3・58・38)	・消極的(7・40・53)	・小心な(13・37・49)
・おおらかな(52・14・34)	・成熟した(3・54・43)	・自信のない(6・41・53)	・臆病な(12・42・46)
・やばな(50・3・46)	・悲観的(10・52・38)	・内向的(6・42・52)	・頼りない(9・48・43)
	・魅力のある(4・51・45)	・まじめな(31・18・51)	・行動力のない(3・46・50)
		・明るい(4・45・51)	

注：カッコ内の数字はそれぞれ左から、各形容詞が「男性」によくみられる傾向、「女性」によくみられる傾向、どちらともいえない（「中性」）、として支持されたパーセントを示している（N=329）。無答が存在したため、合計は必ずしも100パーセントとはなっていない。

・印は最終的な形容詞対（31対）作成のために選択された形容詞（62語）を示している。

頭の悪い、暗い—明るい、親切な—不親切な、などのペアがこれにあたる。最終的に11の中性形容詞対が作成された（表3参照）が、約82パーセントの形容詞は・印の「中性」形容詞の内から選択された。しかし、残り18パーセントについては、主として「あいまいな」形容詞の内から選択がなされ、対極が構成された。

以上2つの選択基準によって、最終的に62語、31対の形容詞が選出された。この内20の形容詞対は、一次元の尺度の上で masculinity — femininity を測定し、他の11の形容詞対は中性的（humanity）なパーソナリティの特性を測定すべく用意されている。結局、性役割認知の観点は、"masculinity — femininity" と "humanity" という2つの次元を、職業自己イメージに関するSDスケールの内部に作り上げたことになる。さて以上のようなSDスケールの内部構造は、対人認知における「評価」「力量性」「活動性」の3次元とは、一体い

かなる関係にあるのだろうか。この疑問に答えるため、性役割における2つの次元と対人認知における3つの次元を組み合わせ、これによって先の31対の形容詞がどのように再区分されるのかを検討してみた。表3がその結果を示している。

表3は、同様な後藤（1981）の分類を若干修正することによって作成された。各対人認知次元への形容詞対の分類の上で、多少の恣意性が残るのはやむをえないが、まず目につくことは力量性次元がすべて、masculinity — femininity に関する形容詞対から構成されているという点である。このことは対人認知における力量性の次元が、他者のパーソナリティの持つ「男らしさ」の把握に向けられていることを意味しよう。これに対し、活動性と評価の側面はM—F次元と、中性のH（humanity）次元の両方に属する形容詞対から構成されている。いいかえれば、活動性や評価次元における他者のパーソナリ

表3 性と意味空間に基づく形容詞対の分類

性役割 次元 対人 認知次元	「男性」-「女性」の形容詞からなる対	「中性」の形容詞からなる対
力 量 性	たくましい(95・1・4)-ひ弱な(20・39・41)	(該当なし)
	頼もしい(91・1・8)-頼りない(9・48・43)	
	指導力のある(87・1・12)-指導力のない(5・60・35)	
	決断力のある(87・1・12)-決断力のない(5・63・31)	
	視野の広い(78・1・21)-視野の狭い(5・63・32)	
	野心のある(78・3・19)-野心のない(5・63・32)	
	強い(69・4・26)-弱い(3・66・31)	
	線の太い(68・6・26)-線の細い(2・73・24)	
活 動 性	自主的(60・2・38)-依存的(4・72・24)	暗い(13・9・78)-明るい(4・45・51)
	意志強固な(68・8・24)-意志薄弱な(7・35・57)	不活発な(3・31・66)-活発な(35・11・54)
	無口な(54・8・38)-おしゃべりな(1・93・6)	非社交的(16・19・65)-社交的(26・21・53)
	理性的(46・17・37)-感情的(4・84・12)	消極的(7・40・53)-積極的(46・8・46)
評 価	やぼな(50・3・46)-おしゃれな(3・79・18)	内向的(6・42・52)-外向的(40・12・48)
	地味な(34・11・54)-派手な(2・71・27)	頭の悪い(2・17・81)-頭の良い(35・3・62)
	楽観的(41・21・38)-悲観的(10・52・38)	魅力のない(18・5・77)-魅力のある(4・51・45)
	雑な(72・2・26)-細やかな(1・85・14)	不親切な(19・9・72)-親切な(7・33・60)
活 動 性	非家庭的(57・4・39)-家庭的(3・81・16)	不誠実な(19・9・72)-誠実な(30・12・57)
	おおらかな(52・14・34)-気持の細かい(4・80・16)	ふまじめな(32・5・63)-まじめな(31・18・51)
	粗野な(74・5・22)-優雅な(6・76・18)	冷たい(15・24・61)-暖かい(16・39・45)
	おおまかな(68・3・28)-繊細な(6・77・17)	

注：カッコ内の数字はそれぞれ左から、各形容詞が「男性」によくみられる傾向、「女性」によくみられる傾向、どちらともいえない(「中性」)、として支持されたパーセントを示している(N=329)。

ティ把握は、男らしさ-女らしさという軸でなされる一方、性を越えた人間性一般という軸においても、平行的に行なわれていることを意味している。本研究の焦点の1つは、女性の職業人としての自己イメージ(同様に女性に対する期待イメージ)の認知が、表3に示されたような構造次元のもとで、現実に行なわれているかどうかを確認することにある。この点については、結果の部分でふれる。

III 方法

1. 被調査者と調査の実施状況

本研究の被調査者は、大別して女子大学生・男子大学生・働く婦人・社会人男子の4グループから構成されている。大学生女子は、就職志向が強く、就職への準備教育も具体的に行なわれているという観点から、すべて女子短大生に限定された。また社会人男子は、他の研究との関連で、働く既婚婦人の配偶者が選ばれた。表4は本研究の対象となった以上の被調査者の構成を示したものである。働く婦人の職業は、保母及び保育園の管理者、銀行と百貨店における販売や事務を中心とした職種、そして病院における看護婦および婦長などの管理職種からなっている。平均年齢は独身者で25.5才、既婚者で35.1

才、全体では29.3才となっている。働く既婚婦人をとうして、彼女たちの配偶者にも質問紙への回答が依頼された。結果として、90パーセントに近い配偶者が回答を寄せてくれた。配偶者の平均年齢は37.6才で、職業は会社員・公務員・自営業・自由業などあらゆる領域にわたっており、特別に片寄った職業への集中は見いだせなかった。女子短大生サンプルには、保育系短大・看護系短大・人文科学系短大と3つの職業志向の異なるグループが含まれている。学年はすべて1年生である。男子学生は2つの4年生大学からとられ、学年は1年生と2年生から構成されていた。

調査は質問紙法によって行なわれ、学生に対しては、1980年10月から11月の間に実施された。働く婦人とその配偶者を対象とした調査は、1981年1月に行なわれた。この調査は働く婦人の職場適応を、女性の社会的役割意識や職業自己イメージ、配偶者の協力的態度、生きがい論などをつうじて解明しようとするもので、表4に示したように色々の職場で働く独身・既婚の女性及び既婚女性の配偶者が被調査者を構成していた。調査は留め置き法によって行なわれ、配布後10日から2週間の間質問紙は回収された。本研究では、この働く婦人の職場適応調査から得られたデータの一部が、学生のデータと統合

されて分析されることになる。なお、働く婦人の職場適応調査は、愛知県婦人労働サービスセンターの委嘱を受け、職場適応研究会が実施したものである。調査結果の詳細については、『働く婦人に関する意識調査—職場適応の構造』、1981年、愛知県婦人労働サービスセンター刊、を参照されたい。

2. 尺度と質問紙の構成

質問紙をつうじ「職業人としての自己イメージ」「期待される女性のイメージ」「社会的役割態度」「職場適応」の4つの尺度が評定された。この内、学生グループと配偶者は前3者について評定し、働く婦人グループは4尺度すべてについて評定した。

①職業人としての自己イメージ：表3に示した31の形容詞対を、7点法のSDスケールとして提示した。各形容詞対は、順序と、対の左右がランダムとなるよう配置された。働く婦人と配偶者に対しては次のような教示が行なわれた。『あなたは「職業人としての自分自身」を日頃どのようにイメージなさっているのでしょうか。以下に対になったいくつかの言葉があります。これらの言葉を用い「職業人としての自分自身」についてお答え下さい。理想としての職業人ではなく職場における日頃の自分自身についてイメージしてみてください。』。選択肢は各形容詞対に対し、「非常に」（1点）から、「どちらでもない」（4点）をへて「非常に」（7点）までの、7-pointスケールとして表示された。この尺度においては、働く婦人は職業人としての自分自身（女性）について評定し、配偶者は同じく職業人としての自分自身（男性）について回答しているのである。職業人ではない学生グループに対しては、次のような教示が行なわれた。『大学卒業後あなたがつきたいと思っている職業や仕事を思い浮かべて下さい。つぎにその職業で仕事をしている「職業人としてのあなた自身」のイメージについておききしたいと思います。以下に対になった……（以下同文）。』。結局この尺度では、現実の職業人（働く女性と男性）と将来の職業人（大学生女子と男子）に関し、それぞれの立場から職業自己イメージが評定されることになる。以上のような職業自己イメージ尺度の取り扱い、職業自己概念における学生と職業人、女性群と男性群といった横断的比較を可能にするだろう。

②期待される女性のイメージ：職業人としての自己イメージとまったく同一の項目を用い、期待される女性のイメージの評定が求められた。大学生グループに対しては、『あなたは女性にはどのような役割が社会一般から期待されていると思いますか。』という教示のもとに、31対のSDスケールの評定が求められた。これに対し働く婦

人と配偶者グループでは、「社会一般から期待される」女性ではなく、『……いっしょに働く「職場の同僚」としてあなた自身が希望し期待している女性のイメージ……』が問題とされた。その理由は個々の職場での働く女性に対する、現実の役割期待を明らかにするためであり、社会一般の期待とか、働く女性への期待といった曖昧でステレオタイプ的な“期待”反応を防止することにあつた。しかし大学生グループに対しては、職業人グループと同じような期待の特定化はできなかった。

③社会的役割態度：Gump（1972）の性役割態度や久世ら（1977, 1978, 1980）の社会的態度の研究を参考に、社会的役割に対する女性の係わり方についての31のステートメントが用意された。先に述べたとおり、これら31のステートメントは、種々の社会的役割領域に対する、伝統主義と進歩主義の女性の役割態度を反映すべく工夫されている。まず女性の社会的役割領域として、家庭（主婦・妻・母）、職業（職業人・組織人・キャリア）、市民（政治・文化・地域社会人）の3つが想定された。次いでこれらの役割における伝統主義と進歩主義の態度が、短い文章の形で提示された。例えば家庭の領域では、「良い妻、良い母親になることが、女性にとって人生最大の目標である」（伝統主義）、「夫が食事を作ったり育児や掃除の手伝いをするのは、ごく自然の姿である」（進歩主義）といった具合で、伝統主義項目4、進歩主義項目5、計9項目が用意された。職業領域では、「もともと女性は男性に比べ仕事に必要な能力が劣っている」（伝統主義）、「自分が一人の職業人として生きているという自覚は、男女を問わず大きな喜びである」（進歩主義）など伝統主義5項目、進歩主義5項目の計10項目が問われた。最後に市民としての役割においては、「女性は政治などに口出しすべきではない」（伝統主義）、「女性は何らかの社会参加をつうじて、家庭の外にある世界と積極的なつながりを持つべきである」（進歩主義）など、伝統主義6項目、進歩主義6項目、計12項目が問題とされた。以上を通算すると、最終的には伝統的役割態度15項目、進歩的役割態度16項目、合計31項目となり、計算としては伝統—進歩という役割態度次元が、3つの大きな女性の社会的役割領域をつうじて、バランスよく表現されたことになる。以上31の態度項目は男性・女性、学生・職業人の全被調査者をつうじ、「非常に反対」（1点）から、「どちらともいえない」（4点）をへて、「非常に賛成」（7点）まで、7-pointスケールによって評定された。なお、全31項目の態度内容は、表6に示されているのでそれを参照されたい。

④職場適応：上記諸尺度と、職場における働く婦人の

経験の質との関連を調べる目的で、職場適応尺度が用意された。この尺度においては、働く婦人が日頃職場環境の諸要因（仕事内容・上司・同僚・処遇や労働条件など）との交渉の中で、どのような経験を得ているのかが問われた。具体的には、「自分の仕事に誇りと責任を感じること」「職場の中でグループの対立があり、人間関係がうまくいかないこと」「仕事がかたく体や神経がまいってしまふと感ずること」など、仕事・人間関係・健康や勤労意欲をめぐる23の質問項目が用いられた。回答は、まったく経験しない（1点）、あまり経験しない（2点）、ときどき経験する（3点）、かなり経験する（4点）、非常に経験する（5点）の5点法によって求められた。質問項目の詳しい内容については、愛知県婦人労働サービスセンター刊、『働く婦人に関する意識調査—職場適応の構造』、1981年を参照されたい。なお、働く婦人に関する意識調査では、上述の4尺度に加え、他の多くの調査項目が質問紙に追加されたが、ここでは省略する。

IV 結 果

分析は次の3つのステップで行われた。第1は因子尺度の構成と、これら尺度の信頼性の検討である。この目的のために、全サンプル（N = 1405）を基礎として、「職業人としての自己イメージ」（以下、「自己イメージ」）、「期待される女性のイメージ」（以下、「期待イメージ」）、「社会的役割態度」（以下、「社会的役割」）を構成する質問項目群が、それぞれ因子分析にかけられた。ついで因子分析の結果から、各因子を構成する主要な質問項目が抜き出され、これらの項目の総合点（平均点）として各因子に対応する因子尺度が作成された。本研究の第1の目的は、これらの因子尺度の信頼性について検討することである。次いで第2のステップとして、上記の手続きから構成された因子尺度間の相関関係が吟味された。この分析の目的は、相関分析をつうじ自己イメージ・期待イメージ・社会的役割を構成する諸次元間の関係を明らかにすることにある。最後に、女子学生・男子学生・独身職業婦人・既婚職業婦人・配偶者といった下位集団が、各々の因子尺度の平均点をつうじて相互に比較された。これらの横断的比較は、職業自己概念や社会的役割態度と、女性のキャリア発達との関係を理解するための、示唆や仮説を生み出してくれる。

1. 因子分析の結果

因子分析は、表4に示した職業人グループ784名と、学生グループ621名、合計1405名のサンプルに基づき、主因子法によって抽出された因子をバリマックス回転する方法で行なわれた。まず、職業自己イメージ尺度の因

表4 働く婦人・学生別にみた被調査者の構成

内 訳	* 団体名	A 学 保 育 大 校	B 保 育 所	C 百 貨 店	D 銀 行	E 百 貨 店	F 百 貨 店	G 病 院	H 銀 行	合 計
	働く婦人とその配偶者	独身者	42	3	48	92	20	26	85	21
既婚者		55	33	40	28	9	31	24	13	233
配偶者		48	29	39	27	9	30	23	9	214
合計		145	65	127	147	38	87	132	43	784
内 訳	* 大学名	A 学 看 護 校	B 短 大	C 大 学	D 短 大	E 大 学	F 短 大	合 計		
	短大生・大学生	男子	—	—	190	—	31	—	221	
	女子	77	73	—	107	—	143	400		
	合計	77	73	190	107	31	143	621		

* 各種団体及び大学の所在地はすべて名古屋市およびその周辺である。

子分析であるが、表3が示唆するとおり、論理的にいつて自己イメージ尺度は5つの因子を析出することが期待されてよい。すなわち、男性—女性（masculinity — femininity）次元での力量性・活動性・評価の3因子と、中性（humanity）次元での活動性と評価の2因子の計5因子である。しかしこれは、論理的に予想しうる最高限度の因子個数であろう。性役割次元に明確な分化がなければ、自己イメージは力量性・活動性・評価の3因子構造を示すかもしれないし、逆に性役割次元の機能が優勢になれば、masculinity — femininity と humanity の2次元のみの構造となるかもしれない。以上のような予測に基づき、自己イメージ尺度の因子分析は、2因子から5因子まで、すべての因子構造の可能性について検討された。なお、同様な手続きは期待イメージについても実行された。検討の結果、表5に示されたごとく4因子での項目分割が、最も適切な意味次元を作り出していることが判明した。表5はこの4因子構造が、期待イメージにも同様に当てはまることを示している。

表5において項目の選択は、当該項目がある因子に対し0.40以上の因子負荷量を持ち、しかも他の因子に対し

表5 「自己イメージ」および「期待イメージ」に対する因子分析の結果

項目番号	項目	職業人としての自己イメージ				期待される女性のイメージ				共通性 (h)
		第I因子 力強さ	第II因子 親しみやすさ	第III因子 社交性	第IV因子 細やかさ	第I因子 力強さ	第II因子 親しみやすさ	第III因子 社交性	第IV因子 細やかさ	
3	決断力のある-決断力のない	.73	.18	.17	.14	.70	.15	.06	.01	.52
25	自主的-依存的	.73	.15	.11	.05	.71	.14	.00	.05	.53
30	積極的-消極的	.71	.21	.32	.07	.63	.27	.06	.09	.48
16	頼もしい-頼りない	.70	.25	.12	.08	.71	.11	.00	.06	.52
23	意志強固な-意志薄弱な	.69	.13	.02	.07	.63	.18	.05	.00	.44
8	強い-弱い	.65	.18	.15	.04	.60	.08	.11	.03	.37
21	たくましい-ひ弱な	.63	.22	.12	.17	.72	.10	.08	.12	.55
28	視野の広い-視野の狭い	.63	.21	.27	.16	.59	.40	.05	.11	.52
1	活発な-不活発な	.60	.27	.33	.02	.56	.11	.15	.02	.35
20	指導力のない-指導力のある	.54	.18	.20	.15	.56	.17	.07	.00	.35
26	線の太い-線の細い	.53	.02	.03	.28	.58	.07	.08	.24	.40
2	理性的-感情的	.46	.13	.00	.22	.55	.12	.12	.06	.33
13	野心のある-野心のない	.42	.10	.17	.02	.47	.06	.09	.08	.24
22	冷たい-暖かい	.23	.66	.24	.10	.14	.72	.04	.06	.54
5	親切な-不親切な	.26	.59	.09	.09	.15	.46	.13	.05	.24
18	誠実な-不誠実な	.33	.59	.09	.21	.32	.57	.17	.07	.46
29	暗い-明るい	.33	.49	.53	.15	.22	.70	.13	.09	.57
15	非家庭的-家庭的	.01	.48	.10	.13	.15	.54	.12	.15	.35
14	地味な-派手な	.13	.19	.65	.08	.09	.16	.56	.02	.35
24	非社交的-社交的	.43	.28	.61	.08	.42	.40	.33	.04	.45
11	やぼな-おしゃべりな	.14	.05	.57	.34	.08	.30	.41	.27	.34
6	無口な-おしゃべりな	.09	.15	.51	.27	.04	.02	.44	.06	.19
7	おおまかな-繊細な	.10	.20	.05	.65	.06	.29	.01	.54	.38
17	雑な-細やかな	.18	.35	.06	.64	.09	.58	.01	.51	.60
12	おおらかな-気持のこまかい	.15	.03	.11	.46	.16	.02	.00	.42	.20
4	頭の悪い-頭のよい	.48	.22	.22	.31	.52	.21	.04	.18	.35
9	まじめな-ふまじめな	.25	.43	.22	.26	.38	.29	.23	.18	.32
10	外向的-内向的	.51	.18	.52	.22	.58	.15	.19	.10	.40
19	楽観的-悲観的	.37	.20	.24	.30	.36	.36	.18	.21	.33
27	魅力のない-魅力のある	.38	.25	.42	.22	.19	.48	.21	.07	.31
31	粗野な-優雅な	.19	.26	.36	.45	.21	.48	.22	.18	.36
分散 (%)		6.57 (45.63)	2.76 (19.17)	2.92 (20.28)	2.15 (14.93)	6.41 (52.28)	3.64 (29.69)	1.14 (9.30)	1.07 (8.73)	

項目No.4から31までの6アイテムは残余項目である。

ては特別目立った貢献をしていない、という基準によってなされた。この基準に合致しない項目No. 4, 9, 10, 19, 27, 31は残余アイテムとして捨象された。しかし項目No. 29, 24, 17は上記の基準を逸脱するものの、これらの項目の重要性にかんがみ、因子尺度の構成要素として選択された。この3項目の採用は、結果的には各因子尺度間の独立性を多少弱めることになる。因子負荷量の検討の結果は、「職業人としての自己イメージ」と「(職場の同僚として)期待される女性のイメージ」という概念上の相異にもかかわらず、両尺度がきわめてよく類似した4因子構造を持っていることを明らかにしている。

第Ⅰ因子は予想どおり力量性の次元であり、「力強さ」の因子と命名された。この因子の内容は、Bem (1974), Spence ら (1975), 伊藤 (1978) などの masculinity — femininity 尺度の項目内容とまったく軌を一にしている。違いは先に指摘したとおり、上記尺度が masculinity と femininity の2次元を持つのに対し、われわれの「力強さ」の因子は1次元のSDスケールより構成されている点である。表3と対応させてみると、力量性として分類された形容詞対は、すべて「力強さ」因子の構成要素として取り込まれていることがわかる。これらの項目に加え、積極的—消極的、活発な—不活発な、理性的—感情的の3つが、活動性の次元から力量性の次元へと進出してきている。しかも、積極的—消極的、活発な—不活発なの2項目は、中性カテゴリーから男性—女性カテゴリーへの移動である。この移動は、原分類での中性度の曖昧性に起因している。例えば積極性は、男子学生では「男性」形容詞として、女子学生では「中性」形容詞として評定され、その結果男女こみの全体としては、「中性」へと分類されているのである。第Ⅱ因子は「親しみやすさ」の次元と名づけられた。表3と対応させてみれば明らかとおおり、この因子を構成する中心的項目は、冷い—暖かい、親切な—不親切な、誠実な—不誠実な、など humanity (中性) 側面の評価という次元を代表していることがわかる。さらに、暗い—明るい、は活動性というよりむしろ評価的であると解釈すれば、上記の傾向はより一貫したものとなる。しかしここでも、非家庭的—家庭的は男性—女性次元から中性次元へと移動している。この形容詞対では、先に述べたような男女間での評定のくい違いは、見い出されていない。したがってこの移動の原因は、学生という片寄ったサンプルに基づく原分類の誤り(分類ミス)、によるものではないかと推察される。第Ⅲ因子は「社交性」を内容としている。地味な—派手な、やばな—おしゃれな、無口な—おしゃべりな、などこの社交性の中心項目は、男性—女性側面での活動性次元を表わしている。しかし肝心の非社交性

—社交性は、表3では中性の形容詞対とされており、ここでもまた分類上の移動が生じている。第Ⅳ因子は「細やかさ」を内容としている。おおまかな—繊細な、雑な—細やかな、おおらかな—気持ちの細かい、の3つの項目はいずれも男性—女性次元での評価を意味している。

以上述べたとおり、自己イメージと期待イメージ尺度の因子分析結果は、表3から予想された5因子構造ではなく、4因子構造が最も適切であることを明らかにしている。まず第1に masculinity — femininity の次元は、対人認知構造のモデルが示唆するとおり、力量性・活動性・評価という3つの下位次元を有することが明らかとなった。従来、性別研究では、このような下位次元を考慮することなく、masculinity に関係する全項目の総合得点と femininity に関係する全項目の総合得点とを比較する方法が、何の疑いもなく採用されてきたが、本研究の結果はこのような方法が厳密さを欠くものであることを示唆している。次に本研究の結果は、伊藤 (1978) が示唆したとおり、特に男性的—女性的というわけではない、人間性一般すなわち humanity レベルでの役割特性の存在を確認している。この特性次元は本研究では、親しみやすさの因子と名づけられたが、この次元が「人間性」一般の「評価」に関連して生じてきていることも注目されてよい。結局、評価の次元では、細やかさ(第Ⅳ因子)と親しみやすさ(第Ⅱ因子)の2因子が抽出された。前者は「女らしさ」の評価に対応し、後者は「人間らしさ」の評価に関係している。活動性次元からは、humanity レベルの因子は抽出されなかった。その原因は、多分、表3中、中性で活動性に係わる特性として分類された形容詞対のほとんどが、なんらかの misclassification から生まれたものであるためと思われる。現にこのカテゴリーの形容詞対は、結果的にすべて他のカテゴリーへと吸収されてしまっている。なお後藤 (1981) は、大学生グループのみの因子分析の結果から、自己イメージに関しては、力量的・評価的・活動的という3因子ではあるが、本研究の結果ときわめて類似した内容を得ている。しかし、期待イメージの分析では、力量性と評価という2つの因子しか見い出すことができなかった。この原因は、大学生という片寄ったサンプルと、「社会一般から期待される女性」という非限定的な期待イメージについての設問法、の2つに帰せられるものと考えられる。

表6は、社会的役割態度の因子分析結果である。先に紹介したとおり、この尺度は3つの大きな役割領域での女性のあり方を、伝統的対進歩的という観点から記述したものであった。したがって因子分析にあたっては、家庭・職業・市民という女性にとっての3つの社会的役割領域に対応して、3つの異なる因子が抽出されることが期

表6 社会的役割尺度の因子分析結果 (N = 1405)

項目番号	項目	因子	第I因子 社会参加の 平等性	第II因子 家庭を守る 伝統主義	第III因子 家庭内分業 の平等性	共通性 (h^2)
12	女性は専門的知識の必要な仕事には適していない。	子	.65	.12	.24	.49
3	女性は政治などに口出しすべきではない。	子	.61	.25	.21	.48
17	家庭のことに真剣に取り組んでいけば、主婦は社会や政治の動きなどまったく気にならないはずである。	子	.60	.09	.19	.41
8	男性と対等に議論できるような知識や思考力が女性にも必要である。	子	.56	.03	.34	.43
10	女性は何らかの社会参加をつうじて家庭の外にある世界と積極的なつながりを持つべきである。	子	.55	.04	.44	.49
18	女性には家庭を守り子どもを育てること以上に、重要な役割は期待されていない。	子	.46	.29	.21	.34
4	もともと女性は男性に比べ、仕事に必要な能力が劣っている。	子	.46	.19	.25	.30
23	職場で男性と同じように頑張らなければならない女性は、結局不幸な女性といわねばならない。	子	.44	.03	.37	.33
2	仕事に打ち込んでいる女性は魅力的である。	子	.41	.61	.16	.41
1	良い妻、良い母親になることが女性にとって人生最大の目的である。	子	.07	.60	.01	.37
13	家庭がみんなのこいの場とならなければ、主婦としては失格である。	子	.22	.55	.20	.40
16	女性が外で働く場合は、家族に迷惑や不都合をかけた範囲にしておくべきだ。	子	.30	.52	.23	.41
5	夫が外で働き妻が家にいて家事を行うという形は、男女のそれぞれの特性にかなったものである。	子	.19	.45	.11	.25
25	女性がいかに成功しても女性本来の喜びである愛情や献身の生活が犠牲となるならば、真の幸福を味うことはできない。	子	.15	.40	.10	.19
9	育児はすべて母親の責任であり、他人にはまかせられない。	子	.25	.23	.55	.42
24	女性が仕事を持って、夫や子供たちは各人の責任を自覚するようになり、かえって家庭に望ましい影響を与える。	子	.23	.20	.52	.37
22	男の子にも女の子にも、平等に家事を手伝わせるべきである。	子	.12	.35	.48	.36
20	夫が食事を作ったり、育児や掃除の手伝いをすることはごく自然の姿である。	子	.37	.07	.48	.38
30	自分の能力や可能性を社会のために役立たせることは、女性としての義務の一つである。	子	.51	.51	.23	.57
6	婦人の地位向上などの女性運動に積極的な関心を持つよりも、主婦としての仕事に専念したほうが良い。	子	.26	.17	.33	.20
7	必要なときは、女性が家庭より仕事を優先させることがあってもしかたがない。	子	.47	.39	.13	.39
11	女性にとって、理屈や教養よりもかわいさや柔直さのほうが大切である。	子	.15	.38	.17	.20
14	女性は近隣の出来事や子供の生活環境を守るための地域活動の原動力とならなければならない。	子	.05	.21	.19	.08
15	男性に適した仕事、女性に適した仕事という区別はもともと存在しない。	子	.40	.13	.40	.34
19	自分が一人の職業人として生きているという自覚は、男女を問わず大きな喜びである。	子	.18	.34	.41	.32
21	女性にとって良い妻、良い母親として生きていることよりも一人の人間として生きていることの方がもっと大切である。	子	.24	.14	.35	.20
26	女性は家庭を持っていても、夫や子供に寄りかかかって生きてゆくべきではない。	子	.23	.07	.37	.19
27	女性が家庭にとじこもりたいて、自分の夫に掃除や皿洗いななど、だんじてさせるべきではない。	子	.22	.48	.39	.42
28	女性は仕事を持っているからといって、自分の夫に掃除や皿洗いななど、だんじてさせるべきではない。	子	.21	.10	.39	.21
29	家庭が円満かどうかは主婦だけでなく、子供、両親等家族全員が平等に責任を負うべきことである。	子	.02	.38	.05	.14
31	お茶やお花などのおけいこ事は、女性のたしなみとして身につけるべきである。	子	.41	.26	.30	.40
		散	(39.48)	(31.32)	(29.20)	
		分				
		(%)				
		項目No 6から31までの12アイテムは残余項目である。				

待された。分析の結果、3つの因子の存在は明らかにされたが、各因子の内容は表6に示すとおり、予想とはだいぶ異なる様相を呈した。まず、第Ⅰ因子は「社会参加の平等性」(以下、社会平等)を表わす内容となった。この因子は、明らかに仕事を中心とした政治・社会・文化の諸領域における、男女間での参加の平等性を表示している。加えてこの因子には、項目番号18のように、家庭役割に対する伝統主義が、負の相関関係で関連を示している。ようするに第Ⅰ因子は、あらゆる役割領域を包

み込む形での、社会的参加の平等主義を謳っているのである。第Ⅱ因子は「家庭を守る伝統主義」(以下、家庭伝統)と名づけられた。表6から明らかとなっており、この因子は女性の社会的役割として、伝統的な良妻賢母の家庭人を表現している。これに対し第Ⅲ因子は、「家庭内分業の平等性」(以下、家庭平等)を内容としており、女性が仕事を持つことから生ずる家事労働の平等主義的分担がテーマとなっている。以上因子分析の結果は、社会参加と家庭における平等主義(進歩主義)と、家庭役

表7 各イメージ尺度における平均得点と構成項目との間の相関関係および信頼性係数

被調査者の構成 因子とその構成項目		職業人としての自己イメージ				期待される女性のイメージ			
		全 体 (1405名)	働 く 婦 人 (570名)	婦人の 配偶者 (214名)	学 生 (621名)	全 体 (1405名)	働 く 婦 人 (570名)	婦人の 配偶者 (214名)	学 生 (621名)
力 強 さ	* 決断力のある	.74	.67	.71	.77	.66	.58	.58	.72
	* 自 主 的	.72	.66	.72	.75	.69	.59	.61	.75
	* 積 極 的	.74	.66	.76	.78	.64	.70	.57	.59
	* 頼 も し い	.72	.68	.69	.72	.69	.66	.59	.66
	* 意 志 強 固 な	.65	.65	.60	.64	.62	.57	.64	.65
	強 い	.65	.56	.56	.69	.57	.45	.44	.65
	* た く ま し い	.63	.55	.60	.69	.71	.63	.65	.72
	* 視 野 の 広 い	.68	.63	.63	.68	.62	.62	.64	.59
	* 活 発 な	.67	.61	.69	.69	.53	.49	.52	.55
	指 導 力 の あ る	.58	.53	.52	.57	.55	.42	.61	.56
	* 線 の 太 い	.46	.35	.54	.51	.54	.49	.45	.51
* 理 性 的	.43	.33	.40	.42	.50	.49	.43	.48	
* 野 心 の あ る	.39	.36	.43	.36	.44	.29	.35	.51	
		(.91)	(.88)	(.90)	(.92)	(.91)	(.88)	(.90)	(.92)
親 し み や す さ	暖 かい	.65	.62	.52	.68	.62	.64	.61	.61
	* 親 切 な	.56	.50	.40	.64	.44	.45	.46	.42
	* 誠 実 な	.50	.48	.40	.51	.53	.55	.54	.52
	明 る い	.50	.44	.42	.55	.55	.60	.57	.50
	家 庭 的	.42	.39	.25	.48	.42	.35	.43	.47
		(.76)	(.73)	(.65)	(.79)	(.75)	(.75)	(.76)	(.75)
社 交 性	派 手 な	.52	.56	.45	.50	.31	.29	.19	.37
	社 交 的	.53	.56	.48	.55	.26	.37	.13	.20
	お しゃ れ な	.45	.45	.42	.46	.31	.40	.28	.24
	お しゃ べ り な	.40	.41	.48	.38	.28	.31	.15	.29
		(.69)	(.71)	(.67)	(.69)	(.50)	(.56)	(.36)	(.48)
細 や か さ	繊 細 な	.61	.63	.58	.59	.43	.41	.42	.42
	細 や か な	.54	.54	.47	.54	.39	.35	.46	.34
	気 持 の こ ま か い	.39	.41	.36	.38	.26	.25	.31	.23
		(.69)	(.70)	(.66)	(.69)	(.56)	(.54)	(.60)	(.54)

* 印は反転項目、またカッコ内の数字は信頼性(標準化された α)係数を示している。

表 8 各社会的役割尺度における平均得点と
構成項目との間の相関関係および信頼性係数

因子とその構成項目	被調査者の構成	全体 (1405名)	働く 婦人 (570名)	婦人の 配偶者 (214名)	学生 (621名)
社会参加の平等性	<p>* 女性は専門的知識の必要な仕事には適していない。</p> <p>* 女性は政治などに口出しすべきではない。</p> <p>* 家庭のことに真剣に取り組んでいれば、主婦は社会や政治の動きなどまったく気にならないはずである。男性と対等に議論できるような知識や思考力が女性にも必要である。</p> <p>女性は何らかの社会参加をつうじて、家庭の外にある世界と積極的なつながりを持つべきである。</p> <p>* 女性には家庭を守り、子どもを育てること以上に重要な役割は期待されていない。</p> <p>* もともと女性は男性に比べ、仕事に必要な能力が劣っている。</p> <p>* 職場で男性と同じように頑張って働かねばならない女性は、結局不幸な女性といわねばならない。仕事に打ち込んでいる女性は魅力的である。</p>	.65 .62 .57 .57 .60 .56 .51 .51 .47 (.85)	.62 .58 .58 .57 .56 .58 .51 .42 .39 (.83)	.56 .52 .59 .56 .58 .60 .50 .58 .44 (.84)	.68 .68 .56 .55 .62 .52 .48 .52 .53 (.85)
家庭を守る伝統主義	<p>良い妻、良い母親になることが女性にとって人生最大の目的である。</p> <p>家庭がみんなのいこの場とならなければ、主婦としては失格である。</p> <p>女性が外で働く場合は、家庭に迷惑や不都合をかけた範囲にしておくべきだ。</p> <p>夫が外で働き妻が家にいて家事を行うという形は、男女のそれぞれの特性にかななったものである。</p> <p>女性がいかにか成功しても女性本来の喜びである愛情や献身の生活が犠牲となるならば、真の幸福を味わうことはできない。</p> <p>育児はすべて母親の責任であり、他人にはまかせられない。</p>	.52 .44 .52 .48 .42 .37 (.73)	.50 .39 .46 .45 .40 .43 (.71)	.49 .60 .55 .45 .47 .42 (.76)	.56 .43 .57 .53 .41 .31 (.74)
家の内部分業性	<p>女性が仕事を持てば、夫や子供たちは各人の責任を自覚するようになり、かえって家庭に望ましい影響を与える。</p> <p>男の子にも女の子にも、平等に家事を手伝わせるべきである。</p> <p>夫が食事を作ったり、育児や掃除の手伝いをすることは、ごく自然の姿である。</p> <p>自分の能力や可能性を社会のために役立たせることは、女性としての義務の一つである。</p>	.47 .53 .45 .37 (.67)	.45 .57 .44 .37 (.67)	.46 .50 .41 .37 (.64)	.48 .49 .49 .38 (.67)

* 印は反転項目、またカッコ内の数字は信頼性(標準化された α)係数を示している。

割における伝統主義の合計3因子の存在を明らかにした。このようなパターンはGumpの7因子構造の性役割態度次元よりも、久世らの革新的・伝統的・大衆社会的という因子構造の社会的態度次元により近い。しかし本研究では、女性独特のサブ・カルチャーに訴える大衆社会的項目群は、はじめから捨象されているので、この次元での対応関係は見出し得ない。最後に残余項目であるが、項目No.6, 11, 19, 21, 28などは高い共通性(h^2)を持つにもかかわらず、因子負荷量パターンの複合性の故に、特定の因子項目として識別することができなかった。これら諸項目の曖昧性は、因子の数を4個、5個と増やしていても、基本的には解消され得なかったことを付記しておく。結論として、女性の社会的役割態度の研究においては、単純な伝統主義一進歩主義の二分法だけでは不十分であり、少なくとも職業・家庭・社会といった領域の違いを考慮する必要があることが、以上の結果から指摘されよう。

2. 因子尺度の内的整合性

因子尺度は、因子分析の結果に基づき選択された項目を各因子ごとに合計し、平均点として算出することによって作成された。表7はこのようにして算出された合成得点と、その構成要素であるアイテム得点との相関関係を、自己イメージおよび期待イメージの各因子尺度ごとに示したものである。この表では、合成尺度とその構成要素間の相関係数は、全サンプル・働く婦人・配偶者・学生という4つの異なるグループごとに計算されている。同様に、内的整合性の指標として、Cronbachの α 係数(標準化された値)がカッコ内の数字として示されている。自己イメージについては、平均点とその構成アイテム間の相関は全尺度にわたってすべて有意に高い。また α 係数も.65から.92の間で、満足すべき高い水準で推移している。以上の事実は、働く婦人・配偶者・学生といった下位サンプルの特殊性に関係なく、すべてについて見い出されている。しかしながら期待イメージの因子においては、社交性と細やかさの2つの尺度に関し、上述のような高い水準での尺度の信頼性は保証され得ないことが示されている。特に社交性尺度に関し、学生と配偶者の両グループで信頼性の値が低い。結論として、表7の結果は8つの因子尺度に対し、ほぼ満足すべき信頼性を与えていると述べることができよう。

表8は、以上と同様な試みを、社会的役割態度の3つの因子尺度に対し適用したものである。信頼性係数は、.64から.85という高い水準にあり、尺度の内的一貫性は良好な水準にあることを示している。また下位サンプルの特殊性に左右されず、 α 係数が各尺度内できわめて

安定した値となっていることも特徴的である。

3. イメージ尺度と社会的役割態度との関係

以上の分析結果は、因子分析的に導出されたいわゆる因子尺度が、ごく一部を除き満足すべき内部整合性を備えたものであることを証明している。それではこれらの因子尺度は、相互にどのような関係を有しているのだろうか。この間に答えるための前段階としてまず、イメージと社会的役割態度のそれぞれの内部で、各因子尺度が相互にどの程度の独立性を有しているのかが検討された。そして第2の分析として、自己イメージ・期待イメージ・社会的役割の相互関連が、各因子尺度間の相関関係の吟味をとうして究明された。

表9は、各尺度内部での、因子間の相関関係を示したものである。相関係数は被調査者全体と、主要な下位集団(働く婦人の独身・既婚別、および学生の男女別)ごとに算出されている。まず、自己イメージについてみると、全体をつうじ、力強さの因子が親しみやすさ・社交性因子とかなりの相関(オーバーラップ)を示していることがわかる。親しみやすさと社交性の間にも、同様な関係が存在している。しかし細やかさの因子は、他の3つの因子と相対的に独立している。そして以上の関係には、サンプル特性に起因する大きな変動は、これといって見い出されていない。自己イメージの評定において、職業人グループでは現実の職業人としての自分自身、学生グループでは仮想的な将来の職業人としての自分自身、について判断がなされたわけであるが、このような職業人としての状況の相違は、職業自己イメージ内部での諸因子の相互関係の上には何の変化ももたらしていない。ということは、現実の職業人、仮想の職業人、男性職業人、女性職業人、独身・既婚といった個別的状況に係わりなく、「職業人としての自己イメージ」はかなり確固とした概念の実体性と安定性をそなえているということになる。

期待イメージに関しても、以上と同様なことがいえる。しかし例外は学生、特に女子学生である。働く婦人と、婦人の配偶者の間では、「職場の同僚として期待される女性のイメージ」の概念は、基本的には「職業人としての自己」と同一内容である。特に働く婦人にとっては、力強さの因子と親しみやすさの因子は、相互の独立性が懸念される程、高い相関関係を示している。このことは職業人としての女性には、masculinityとしての力強さと、humanityとしての親しみやすさの両次元が、働く婦人の立場からも男性の立場からも、強く望まれていることを意味している。しかし女子学生(短大生)では、以上の関係がまったく一転する。力強さの期待イメ

表9 各尺度内での因子間の相関関係

被調査者 尺度とその構成因子		全 体 (1405名)	働く婦人		婦人の 配偶者 (214名)	学 生			
			全 体 (570名)	独身者 (337名)		既婚者 (233名)	全 体 (621名)	女子 (400名)	男子 (221名)
自己 イメージ	力強さ×親しみ	.52	.51	.53	.43	.52	.46	.44	.53
	力強さ×社交性	.46	.42	.47	.40	.46	.52	.55	.51
	力強さ×細やかさ	.14	.04	.10	-.06	.08	.15	.21	.05
	親しみ×社交性	.38	.38	.50	.24	.32	.39	.34	.44
	親しみ×細やかさ	.28	.24	.26	.18	.29	.25	.35	.09
	社交性×細やかさ	.06	-.02	.01	-.06	.04	.12	.13	.14
期待 イメージ	力強さ×親しみ	.31	.66	.68	.62	.51	.07	-.08	.28
	力強さ×社交性	.30	.35	.43	.22	.18	.33	.50	.04
	力強さ×細やかさ	-.07	.13	.16	.05	.23	-.17	-.22	-.18
	親しみ×社交性	.17	.33	.42	.19	.26	.01	-.08	.12
	親しみ×細やかさ	.30	.25	.21	.31	.42	.29	.38	.13
	社交性×細やかさ	.10	.15	.19	.09	.29	-.01	-.10	.15
社会的 役割	社会平等×家庭伝統	-.43	-.37	-.40	-.30	-.41	-.46	-.41	-.35
	社会平等×家庭平等	.60	.57	.60	.51	.60	.61	.56	.53
	家庭伝統×家庭平等	-.44	-.36	-.39	-.32	-.50	-.46	-.44	-.35
「自己」 対 「期待」	力強さ×力強さ	.09	.27	.22	.35	.27	.12	.12	.22
	親しみ×親しみ	.37	.37	.33	.44	.40	.35	.35	.34
	社交性×社交性	.28	.37	.36	.39	.12	.24	.23	.22
	細やかさ×細やかさ	.23	.22	.20	.26	.19	.19	.24	.10

$r \geq .13$ の場合, $P < .05$

$r \geq .17$ の場合, $P < .01$

ージ (masculinity) は、それと対照的な社交性 (feminity) の因子と、どのグループより強い相関 ($r = .50$) を示しているものの、humanity の側面である親しみやすさとは、ほぼゼロ ($r = -.08$) の相関関係しか有していない。また力強さと、女性的側面の評価である細やかさが、有意な負の相関 ($r = -.22$) を示しているのも女子学生だけである。以上の事実は女子学生にあっては、期待イメージ (なかでも親しみやすさと社交性の次元) の内部分化が不十分であり、力強さと社交性が結合された masculinity - feminity 因子と、細やかさと親しみやすさが融合した humanity 因子という、単純2次元構造の存在を示唆している。現に後藤 (1981) は、学生サンプルのみに基づく期待イメージの因子分析において、力量性 (本研究の力強さの因子) と評価 (親しみやすさと細やかさの双方を含む) の2因子構造を得ているが、表9の学生グループの結果は、この事実ともよく符合している。加えて学生に対しては、期待イメージは「社会一般が期待する女性のイメージ」として問われており、職業人の場合の「職場の同僚として期待される女性のイメージ」の設定内容とはその意味

を異にしている。この違いが学生グループと職業人グループの間で、相互に異なる期待イメージの内部構造を作り出す一因となっていることも十分考えられる。

社会的役割態度の3スケールは、疑問の余地のない安定した相互関係を示している。すなわち、2つの平等主義因子は正の相関を持ち、加えてこれらの尺度は一貫して、家庭の伝統主義と負の相関関係を示しているのである。しかし、社会参加の平等性と家庭内分業の平等性と

の相関は、.51 から .61 と、若干高すぎるきらいはある。最後に、自己イメージと期待イメージでの、対応する因子尺度間での相関関係であるが、表9の結果は両者の間に一応の対応関係が存在していることを示している。例えば、自分自身を力強い職業人としてイメージしている既婚職業婦人は、同様に力強いイメージの女性を職場の同僚として期待するかなりの強い傾向 ($r = .35$) を有していることになる。このような対応関係は、親しみやすさの次元において最も一貫しているようである。加えて、ほとんどすべての場合、対応する尺度間での相関は、非対応関係 (例えば力強さと親しみやすさ) の相関よりも高い値を示していた。しかし逆に、自己イメージ

女性の社会的役割態度と職業自己イメージ

対期待イメージの相関が強すぎる場合には、評定における社会的望ましさのバイアスの作用を懸念しなければならないだろう。なぜならこの評定バイアスは、期待イメージにそって自己像を美化しようとする、意識的・無意識的傾向に他ならないからである。本研究においては、表9の結果が示すとおり、社会的望ましさのバイアス傾向はごく微弱であると想像される。

次に自己イメージおよび期待イメージと、女性の社会的役割態度との相関関係を吟味してみよう。先に何度か言及したとおり、社会的役割態度スケールが、職業を含む社会的役割に対する女性の伝統主義一進歩主義の態度を問題としている以上、それは女性の職業自己概念や期待の職業人像と何らかの有意な関係を有しているはずである。というよりも、このような有意な関連性が確認されてはじめて、尺度の外的妥当性について論ずること

が可能となる。本研究では、職業人としての「力強さ (masculinity)」と、社会的役割における女性の進歩主義的態度との関連性が、一貫して想定されてきた。表10は、この点の検討をも含みつつ、自己イメージおよび期待イメージ尺度と、社会的役割尺度との相関関係を一覧表のかたちで示したものである。

まず自己イメージと社会的役割の関係では、予想どおり力強さの自己イメージと、社会参加の平等主義の役割態度との間に、働く婦人で $r = .17$ 、女子学生で $r = .29$ と、ゆるいながらも一貫した正の相関関係が見出されている。因果関連の方向性は別として、力強い職業自己概念を持つことは、あらゆる社会的役割における、参加の男女平等意識と有意な関係でつながっている。この傾向は女子短大生において特に強い。婦人の配偶者と男子学生においては、力強さの自己イメージは、女性の社

表 10 自己イメージ・期待イメージ尺度と社会的役割尺度との相関関係

被調査者の構成		全 体 (1405名)	働 く 婦 人			婦人の 配偶者 (214名)	学 生		
			全 体 (570名)	独身者 (337名)	既婚者 (233名)		全 体 (621名)	女子 (400名)	男子 (221名)
尺 度									
職 業 人 と し て の 自 己 イ メ ー ジ	力強さ×社会	.06	.17**	.15*	.13*	.04	.12	.29**	.04
	力強さ×家・伝	.07	-.01	-.04	.11	.17**	.03	-.06	.15*
	力強さ×家・平	.00	.09	.05	.14*	-.09	.06	.17**	-.07
	親しみ×社会	.07	.12	.08	.12	.10	.14	.13*	-.02
	親しみ×家・伝	.20**	.16*	.12	.31**	.23**	.20**	.27**	.18**
	親しみ×家・平	-.02	-.02	-.01	-.05	.03	.03	-.05	.05
	社交性×社会	.05	.01	.06	-.05	-.05	.14*	.10	-.02
	社交性×家・伝	.01	.00	-.03	.04	-.08	.05	.09	.13*
	社交性×家・平	-.03	-.05	-.10	.04	-.08	.02	.01	-.13*
	細やかさ×社会	-.02	-.04	-.05	-.04	.04	.03	.11	.03
	細やかさ×家・伝	.11	.06	.02	.12	.12	.12	.14*	.04
	細やかさ×家・平	-.06	-.08	-.04	-.13*	.05	-.03	-.04	.05
期 待 さ れ る 女 性 の イ メ ー ジ	力強さ×社会	.43**	.31**	.29**	.33**	.52**	.43**	.25**	.22**
	力強さ×家・伝	-.07	-.00	-.03	.03	-.05	-.09	-.00	.11
	力強さ×家・平	.31**	.24**	.28**	.17**	.25**	.33**	.21**	.24**
	親しみ×社会	.16*	.23**	.19**	.29**	.18**	.13*	.14*	.03
	親しみ×家・伝	.16*	.14*	.10	.19**	.24**	.15*	.18**	.18**
	親しみ×家・平	.08	.14*	.16*	.11	.03	.08	.05	-.05
	社交性×社会	.16*	.13*	.16*	.12	.15*	.19**	.21**	.12
	社交性×家・伝	.04	.04	.04	.02	.05	.05	.07	.08
	社交性×家・平	.09	.12	.15*	.09	-.06	.10	.15*	-.05
	細やかな×社会	.04	.02	.02	.06	.05	.14*	.12	.19**
	細やかな×家・伝	.08	.06	.06	.03	.20**	.01	.03	.00
	細やかな×家・平	-.02	-.02	-.02	-.00	-.12	.08	.06	.10

*P<.05

**P<.01

社 会=社会参加の平等性

家・伝=家庭を守る伝統主義

家・平=家庭内分業の平等性

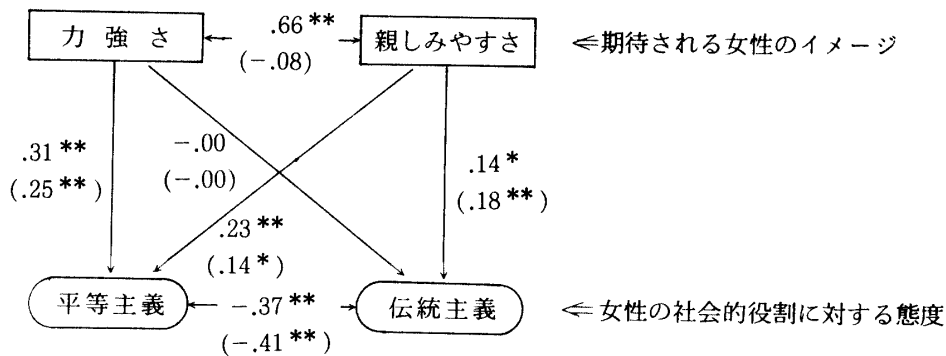
* $P < .05$ ** $P < .01$

図2 期待される女性のイメージと、女性の社会的役割に対する態度との相関関係：働く婦人と女子学生（カッコ内）の場合

会参加に対する平等主義的態度とは、何の関係も有していない。逆に、職業人として力強いイメージを持った男性は、家庭を守る伝統主義を女性の社会的役割として強調している。加えて、男性・女性を問わず、職業人としての自分自身を親しみやすい人間と考えている人は、進歩主義的ではなく、伝統主義的な女性の役割を支持する態度を持っていることが一貫した傾向として出てきている。すなわち、女性にとって masculinity は平等主義と、humanity は伝統主義と、それぞれ近接した関係を有しているということになる。

表10の結果は、女性の社会的役割に対する平等主義—伝統主義の態度は、どのような女性を人々が期待しているかという、期待される女性のイメージとより密接な関係があることを示している。すなわち、職場の同僚として、ないしは社会一般の傾向から、力強い女性のイメージを期待する人々は、男女を問わず一貫して平等主義的な女性の社会的役割を支持している。同様に、力強さの期待は、家庭内分業の平等主義とも有意に関連している。これに反し、女性に対する親しみやすさの期待は、社会参加の平等主義と家庭中心の伝統主義という、相互に対立し負の相関関係にある2つの態度と、有意な正の相関関係を有しているのである。これは一見矛盾を思わせる結果であるが、親しみやすさの因子が、humanity 側面の評価を意味していたことを考えれば、一応の納得はいく。すなわち「人間として」親しみのもてる（親切・誠実・家庭的・暖い・明るい）女性を期待することは、女性の社会的役割として、平等主義的社会人と伝統主義的家庭人の相対立する役割を、同一の女性に期待するということになる。しかし masculinity（力強さ）や femininity（社交性）の期待においては、このような困難は

生じてこない。

図2は以上の結果を、図式的にまとめたものである。働く婦人では、力強さへの期待は同時に親しみやすさへの期待 ($r = .66$) であり、女性の社会的役割に対する平等主義的態度 ($r = .31$) をも意味する。また、力強さの期待は、伝統主義の態度とは無縁である。これに対し、親しみやすさへの期待は、平等主義 ($r = .23$) と伝統主義 ($r = .14$) とも有意な相関関係を持っている。そして図2から明らかなおと、平等主義と伝統主義は明白に相対立する ($r = -.37$) 態度なのである。なお、親しみやすさと伝統主義の正の相関関係は、自己イメージについても見出すことができ(表10参照)、両者がかなり一貫した関係にあることを示唆している。図2において、女子学生の場合も相関関係のパターンは、だいたい以上の説明と同じである。ただ先にも指摘したとおり、力強さと親しみやすさへの期待は、 $r = -.08$ と基本的には無相関で、婦人の場合の高い相関関係とまったく対照的である。

4. 働く婦人の職場適応との関係

働く婦人グループに対しては、職場適応スケールが適用されたが、因子分析の結果は「仕事のやりがい」「心身適応」「人間関係適応」の3因子の存在を明らかにした。仕事のやりがいとは、働く女性が職場において仕事に誇りを感じ、職業人としての自覚や意欲に燃え、専門家としての実力・リーダーシップなどを発揮する経験を意味している。これに対して心身適応因子は、なぜ仕事を続けているかわからなくなったり、やめてしまいたいと感じたり、性格が仕事に向かないと思ひ、仕事がつく体や神経がまいってしまう経験を内容としている。最後の

表 11 働く婦人にみる職場適応の諸側面と自己イメージ・期待イメージ・社会的役割尺度との相関関係

被調査者の 構成と職場 適応諸尺度		職 場 適 応 の 諸 側 面								
		仕事のやりがい			心身適応			人間関係適応		
		全 体 (570名)	独身者 (337名)	既婚者 (233名)	全 体 (570名)	独身者 (337名)	既婚者 (233名)	全 体 (570名)	独身者 (337名)	既婚者 (233名)
自 己 イ メ ジ	力 強 さ	.35**	.37**	.25**	.42**	.43**	.32**	.20**	.26**	.09
	親しみやすさ	.27**	.24**	.24**	.37**	.35**	.34**	.19**	.21**	.12
	社 交 性	.11	.17**	.06	.14*	.15*	.18**	.07	.13*	-.02
	細 や か さ	.10	.09	.10	.15*	.20**	.04	.07	.09	.02
期 待 イ メ ジ	力 強 さ	.20**	.16*	.25**	.12	.10	.17**	.10	.12	.05
	親しみやすさ	.20**	.14*	.27**	.11	.06	.19**	.09	.12	.05
	社 交 性	.04	.06	.07	.08	.09	.14*	.01	.08	-.07
	細 や か さ	-.00	-.01	.04	-.02	-.03	.03	.01	.05	-.02
社 会 的 割	社 会 平 等	.27**	.28**	.22**	.14*	.13*	.07	.08	.05	.10
	家 庭 伝 統	-.05	.03	-.08	-.02	-.00	.03	-.03	.02	-.08
	家 庭 平 等	.11	.11	.10	.03	.03	.00	-.01	-.05	.06

*P<.05
**P<.01

人間関係適応は、グループの対立や同僚・上司などとの人間関係の不一致を意味していた。なお、職場適応スケールについて詳しくは『働く婦人に関する意識調査—職場適応の構造』を参照されたい。

表11は上記の職場適応の3因子と、自己イメージ・期待イメージ・社会的役割の諸尺度との、相関関係を示したものである。まず自己イメージに関していえば、自分自身を職業人として力強い（masculine な）存在と認知している女性は、仕事においてやりがいを経験し、心身適応もよく、人間関係適応も良好であることが示されている。また、親しみやすさの自己イメージについても、これと同様なことがいえる。ここでも、力強さと親しみやすさの自己イメージは、両者そろって職場適応に対し有意な関連を示している。社交性と細やかさの自己イメージは、心身適応と主として関連を持っている。しかし、職場適応全体との関連はだいぶ弱い。次に期待イメージであるが、力強さと親しみやすさは、仕事のやりがいと一貫した関係を示している。職場で自分の仕事に日頃やりがいを感じている女性は、自己イメージと同様、やはり力強く、親しみやすさのある女性を、職場の同僚として期待しているということになる。また既婚女性については、心身適応に関しても同様なことがいえる。最後に社会的役割態度と職場適応の関係であるが、表11は社会参加の平等主義を支持する態度が、独身・既婚を問わず働く女性の仕事のやりがい感と心身適応に対し、有意な相関関係を持っていることを示している。女性が職業を持ち、自分の仕事でやりがいを感じずらなければ

なる程、社会参加における平等主義を支持する態度は強まってゆくのである。この事実は社会的役割態度スケールの妥当性を示す、有力な証拠の一つといえよう。

5. 横断的比較の結果

本分析の最後のステップとして、各因子尺度平均値の下位集団間での比較をつうじ、女性にとって職業自己概念や社会的役割態度が、どのような意味を持つのかを検討してみよう。表12は、各因子尺度の平均と標準偏差を、5つの下位グループを基準に比較したものである。一元配置の分散分析による比較の結果は、F値を用いて示されているが、いずれの尺度においてもグループ間の差は、統計的有意の水準に達している。これら有意差の意味をさぐるため、各尺度の平均値を女性グループ内（女子学生・独身女性・既婚女性）および男性グループ内（男子学生・配偶者）で、もう少し詳しく検討してみよう。

まず女性グループでは、不思議なことに女子学生が、力強さをはじめ自己イメージの4尺度すべてにおいて、最高度の平均値を示している。現実の職業生活の厳しさや、職業人としての自己の有効性についてごく僅かな経験しかもたない女子学生が、どうして最も肯定的な職業自己概念を持ち得るのだろうか。この種の傾向は、学生から職業人へというような、キャリア発達の「移行過程」(transition process) に一般的にみられる現象であり、非現実的期待、ないし理想主義的な自己への期待の問題として論じられている (Wakabayashi, 1980; 若林, 1981)。いうなれば学生は未熟であるが故に、そ

表 12 各因子尺度の平均値と標準偏差および分散分析のF値

因子		サンプル群	全体	独身婦人	既婚婦人	女子学生	男子学生	配偶者	F 値
		サンプル数	(1405名)	(337名)	(233名)	(400名)	(221名)	(214名)	
自己イメージ	力強さ		4.54 (0.83)	4.13 (0.72)	4.43 (0.72)	4.65 (0.80)	4.75 (0.88)	4.89 (0.80)	40.98
	親しみやすさ		5.13 (0.79)	4.77 (0.76)	5.08 (0.75)	5.37 (0.77)	5.16 (0.80)	5.25 (0.73)	30.43
	社交性		4.28 (0.08)	4.23 (0.81)	4.16 (0.79)	4.49 (0.75)	4.22 (0.82)	4.16 (0.82)	10.53
	細やかさ		4.20 (0.99)	3.97 (0.96)	4.08 (1.00)	4.29 (0.99)	4.41 (0.97)	4.31 (1.00)	9.73
期待イメージ	力強さ		5.04 (0.74)	5.32 (0.64)	5.33 (0.61)	5.06 (0.72)	4.35 (0.67)	4.97 (0.68)	84.62
	親しみやすさ		5.79 (0.72)	5.73 (0.73)	5.77 (0.65)	5.86 (0.71)	5.74 (0.76)	5.86 (0.74)	2.46
	社交性		4.70 (0.55)	4.74 (0.57)	4.64 (0.52)	4.76 (0.53)	4.66 (0.59)	4.61 (0.53)	4.29
	細やかさ		4.68 (0.85)	4.51 (0.78)	4.39 (0.87)	4.84 (0.83)	4.77 (0.81)	4.87 (0.91)	17.58
社会的役割	社会参加の平等性		5.16 (0.83)	5.27 (0.81)	5.47 (0.73)	5.43 (0.66)	4.41 (0.71)	4.93 (0.85)	85.88
	家庭を守る伝統主義		4.83 (0.91)	4.81 (0.90)	4.57 (0.92)	4.69 (0.88)	5.17 (0.79)	5.04 (0.92)	18.74
	家庭内分業の平等性		4.40 (0.94)	4.54 (0.90)	4.59 (0.87)	4.54 (0.89)	3.91 (0.91)	4.22 (0.99)	25.22
D期待自己	力強さ		0.50 (1.06)	1.19 (0.85)	0.89 (0.76)	0.41 (1.01)	-0.39 (0.98)	0.09 (0.90)	123.69
	親しみやすさ		0.67 (0.85)	0.96 (0.86)	0.69 (0.75)	0.49 (0.85)	0.57 (0.89)	0.61 (0.80)	15.66
	社交性		0.42 (0.84)	0.51 (0.81)	0.49 (0.76)	0.27 (0.81)	0.44 (0.90)	0.46 (0.92)	4.85
	細やかさ		0.48 (1.15)	0.54 (1.11)	0.32 (1.42)	0.55 (1.12)	0.35 (1.20)	0.57 (1.22)	2.75

F ≥ 2.37の場合 P < .05

F ≥ 3.32の場合 P < .01

カッコ内の数字は標準偏差を示す。

れだけ肯定的な自己概念を形成し得るのである。これに反し、現実の仕事の厳しさや、自己の無力さを経験する機会が多い独身職業婦人にとっては、職業人としての自己イメージはすべての領域で最低の水準となっている。期待イメージでは、グループ間の差は相対的に縮小している。すなわち女性であれば誰でも、ほぼ同様に、力強さや親しみやすさを他の同僚の女性（ないし女性一般）に期待しているということになる。しかし細かくみると、職業婦人は学生に比べ、より力強い同僚を期待していることが読みとれる。逆に学生は、細やかさの側面がより期待されているものと信じている。社会的役割態度では独身婦人が最も伝統主義的で反平等主義の傾向を示している。女子学生は、既婚婦人に次いでリベラルである。

最後に、期待イメージから自己イメージ得点を引いた

乖離得点（Dスコア）に目を転じてみよう。まず3つの女性グループにおいて、Dスコアはすべて正の値となっている。いいかえれば、女性は力強さ・親しみやすさ・社交性・細やかさすべての面で、自分自身は期待とマッチせず、結果として常に自分以上のものを同性の女性に期待するということであろう。次に、前述の結果から予想されるとおり、Dスコアは独身職業婦人において最高で、次いで既婚婦人で高い。女子学生は、細やかさの側面を除いて、最も低いDスコアの値を示している。まず力強さの因子では、独身婦人は最も低い自己評価を行っているものの、期待の評定は既婚婦人と同じく最も高い水準にある。独身女性の自己評価の低さは、職業人としてのキャリアの低さを意味し、期待の高さは働く女性としての、独身・既婚を越えた職業人共通の認識を反映するも

のといえよう。これに対し女子学生では、このような職業経験の基盤がない。したがって自己評価も期待も、ともに高い値となる。かくしてDスコアは、女子学生において最低となり、独身婦人において最高の値をとる。表12の結果は、以上の事実は力強さだけではなく、親しみやすさや社交性においても観察される、ごく一般的傾向であることを示している。

次に男性（男子学生と配偶者）グループについてみてみよう。自己イメージに関しては、すべての側面で学生と配偶者の間に、顕著な差は見られない。期待される女性のイメージでは、配偶者群が男子学生に比べ、より力強い女性を期待していることがわかる。この事実は配偶者群が、同じ職業人として、職場の女性に対してよせる高い期待を意味しよう。しかしこの期待の高さは、女性自身の同性への期待と比べ、かなり見劣りがする。女性の社会的役割に対する態度では、男子学生が最も保守的・伝統主義であることがわかる。これに対し配偶者群はやや平等主義的であるが、女性自身ほどではない。Dスコアにおいては、男子学生が力強さの側面で-0.39と、負の乖離得点を示している。すなわち男子学生は、自分自身の力強さの水準以下でしか、女性の力強さを期待しないということになる。配偶者群では、ちょうど自分自身と同じぐらいの力強さが、職場の同僚としての女性に期待されている。

図3と図4は、表12の結果の一部を図式的に示したものである。横軸には5つの被調査者集団が配置されているが、それらの位置づけは女性グループでは、女子短大生・独身職業婦人・既婚職業婦人と、大まかなキャリア発達の段階を示している。同様な配置は、男子グループにおいてもなされている。図3では、力強さに関する自己イメージ・期待イメージ・Dスコアの3つの値が、各グループごとに示されている。まず第1に指摘されることは、女性グループにおいては学生から職業人への移行は、力強さ（masculinity）の喪失と逆にそれに対する期待の増大、というアンビバレントな過程として把握されうるといふ点である。すなわち、力強さにおけるDスコアの増大の過程、ということになる。この過程は女性が結婚し、職業人としてのキャリアを高度化させるにつれ、より安定したもの（乖離が縮少しDスコアが相対的に小さくなる傾向）へと、再び変化していく。しかし、基本的なアンビバレントの状態は、いぜん継続するようである。これに反し男性の場合、学生から職業人への移行には、上のような困難な問題は介在していない。図3の結果は、女性のキャリア発達過程と、その過程に内在するいくつかの心理学的問題を示唆しているが、これらの問題はより厳密な横断的比較ないしは縦断的なキャリ

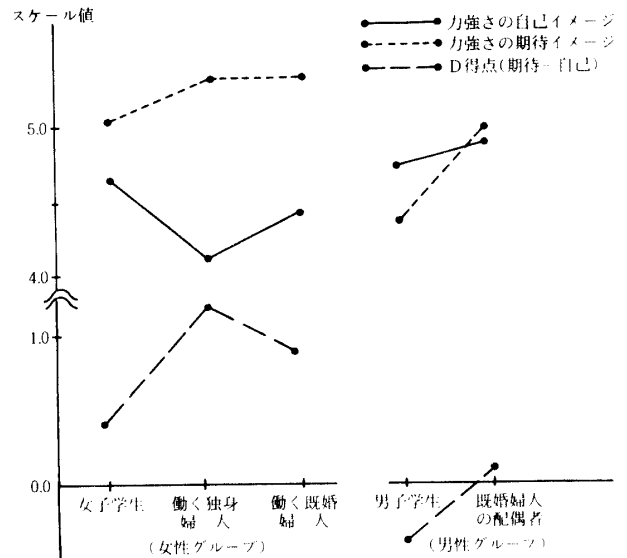


図3 被調査者のグループ別にみた力強さのイメージ得点

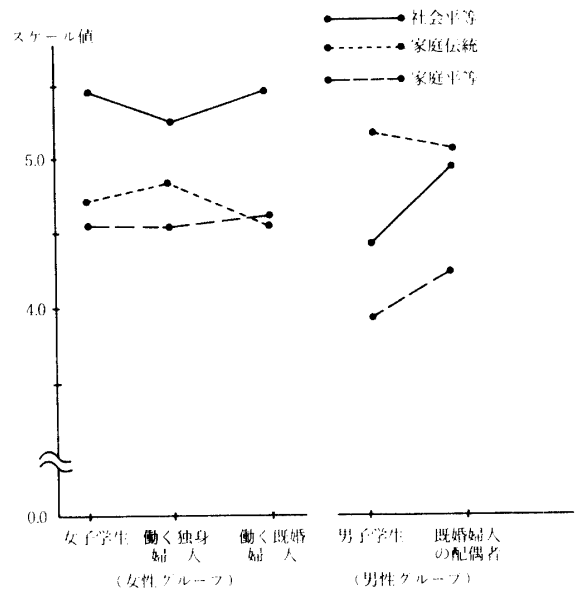


図4 被調査者のグループ別にみた女性の社会的役割尺度得点

ア発達過程の追跡研究をつうじて、一層本格的に究明される必要がある（山田，1981）。

図4は3つの社会的役割態度について、グループごとの平均値をプロットしたものである。女性グループでは、社会参加の平等性は一貫して強く支持されている。しかし独身婦人では、この社会平等の態度は相対的に低く、逆に家庭中心の伝統主義は女性グループ中最も高い。ここにも図3と同じような、女性にとっての職業キャリア形成上の問題点が反映されている。この問題点は、たぶ

ん次の2つに要約されるだろう。第1は、現実の職業の世界で多くの女性が直面するであろう（特に男性との対比で）自己の無力感の経験、およびその結果としての masculinity の喪失。そして第2は、結婚をひかえた独身職業婦人の段階での、家庭中心の伝統主義の抬頭、およびそれと平行した femininity 次元の拡大である。これらはいずれも仮説にすぎず、今後より深く追求される必要がある。最後に、図4では男子学生の、女性の社会的役割に対する保守的態度が如実に示されている。自分自身が働く女性の夫である「配偶者」は、さすがに学生と比べ高い平等主義の態度を示している。しかしその高さは、女性自身の示す水準にはとても及ばない。

V 結果のまとめと討論

本研究では、女性の職業選択やキャリア発達研究の基礎となるべき、職業自己概念と社会的役割態度の2つの尺度の構成が試みられた。前者は、性役割研究が問題としている masculinity — femininity の次元と、対人認知構造の研究が明らかにしている評価・力量性・活動性の3次元とを統合する目的で作成された。結果としてこの尺度は、性役割と対人認知の諸次元を代表する31対の形容詞からなる SD スケールとして完成された。この SD スケールを用い、学生と職業人の被調査者にに基づき、「職業人としての自分自身のイメージ」が評定された。因子分析の結果は、本研究が予想したとおり、性役割次元と対人認知次元の融合を示唆する4つの因子、すなわち、力強さ（力量性にかかわる masculinity — femininity）、親しみやすさ（humanity の評価）、社交性（活動性にかかわる masculinity — femininity）、細やかさ（評価次元の masculinity — femininity）の存在を明らかにした。「期待される女性のイメージ」についても、ほぼ同様な結果が得られた。一方、社会的役割態度スケールでは、職業・家庭・市民という役割領域における、女性の平等主義的—伝統主義的な役割態度が問題とされた。予想としては、家庭・職業・政治・文化など各領域に対応する因子が数多く抽出されることが考えられたが、因子分析の結果は、「社会参加の平等性」とも呼べる全役割領域に係わる平等主義因子と、「家庭を守る伝統主義」および「家庭内分業の平等性」の3因子の存在を明らかにした。以上の分析結果から、各因子に対応する因子尺度が、構成項目の総平均点として作成されたが、これら因子尺度の信頼性（ α 係数）および次元性は、ごく一部を除き十分満足のゆくものであった。

働く婦人においては、職場適応についてもデータが得られた。これらを加え、構成された尺度の相互関係が吟味された。その結果は、次の4点に要約される。①力強

さの自己イメージは、社会参加の平等性を支持する態度と一貫した有意な関係を持っている。すなわち職業や市民（政治・文化）の役割における男女の平等性が主張される背後には、女性自身による masculinity の自己認識が存在している。これに対し、親しみやすさの自己イメージを強く抱く女性は、伝統的な良妻賢母の役割を支持する傾向がより強い。②女性に力強さが期待されると信じている女性（男性も含めて）は、女性の社会的役割に対して強い平等主義的態度を持っている。しかし親しみやすさへの期待は、平等主義と同様女性役割の伝統主義をも支持する傾向を示している。親しみやすさの次元は humanity の評価を意味した。このことは、現代に生きる女性は、男性と同一次元での「女性」と、「人間性」としての女性の両側面から期待を感じ、これらの期待に対し社会的役割における平等主義と伝統主義という、相対立する態度をもって答えようとしているということになる。③働く婦人グループでは、力強さの自己イメージと社会平等の態度は、両者とも仕事のやりがいを中心とした職場適応の水準に密接な関係を示していた。このことは女性にとって（多分男性にとっても同様に）、自己概念の強度や平等主義的役割態度の維持が、職業生活への適応と不可分の関係にあることを意味している。親しみやすさの自己イメージについてもほぼ同様なことがいえるだろう。④女性にとって、学生から職業人への移行は、自己概念の力強さの喪失と、自己の社会的役割に対する態度の保守化の傾向として把握できる。しかし女性が結婚し、職業人としてのキャリアを積むにしたがい、自己概念の力強さと進歩的役割態度は増大してくる。以上の過程の背後には、女性の職業選択過程とその後の職業経験によって体験される、自己概念の「現実吟味（reality testing）」と、その結果としての自己評価の低下という問題がまず考えられる。これに次いで、結婚か仕事かという、女性のキャリア形成にとっての最大の選択問題が、自己イメージと役割意識に与える影響力の問題が考えられる。しかし以上は、大まかな横断的比較分析から生まれた仮説の域を出ず、今後女性の職業キャリア発達に関するよりきめ細かい研究をつうじて、深く追求される必要がある。

最後に本研究の問題点として、次の5点が指摘されねばならない。①本研究の職業自己に関する SD スケールは、究極的には男らしさ・女らしさのステレオタイプに基礎を置いている。これらの特性は、基本的なパーソナリティの次元（内向性—外向性、道具的志向—表出的志向など）と、どのような関係を有するのだろうか。②社会的役割に対する態度次元として、伝統主義—平等主義の一次元だけでは単純すぎないだろうか。例えば、Gump

の示唆している他人志向—自己志向次元など、考慮される必要がある。③本研究においては、社会的望ましさや自己防衛的なバイアスが、評定に混入する危険が十分にチェックされていない。自己イメージ・期待イメージ・社会的役割での諸尺度間の相関関係の相対的低さは、上述のバイアスの懸念を一応払拭してくれるが、これらは間接的な証拠にすぎない。④本研究で開発された諸尺度は、現実の社会過程（例えば女子学生の職業社会化や職業選択、女性のキャリア発達など）に対して、何がしかの説明を与えることができるだろうか。今後の究明が待たれる。⑤被調査者として、専業主婦やパートの女性、4大生、高校生なども加えるべきであったろう。また、男性グループのサンプリングと、それに基づく女性・男性の比較も、もう少し体系的になされる必要がある。以上は残された課題である。

文 献

- 愛知県婦人労働サービスセンター 1981 働く婦人に関する意識調査—職場適応の構造—。
- 東 清和 1979 性差の社会心理 大日本図書。
- Baucom, D. H. 1976 Independent masculinity and feminity scales on the California Psychological Inventory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 876.
- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.
- Carter, H. D. 1940 The development of vocational attitudes. *Journal of Consulting Psychology*, **4**, 185-191.
- Cooley, C. H. 1909 *Social organization: A study of the larger mind*. Charles Scribner's Sons, New York. 大橋 幸・菊池美代志訳, 社会組織論—拡大する意識の研究— 1970 青木書店。
- 後藤宗理 1981 女性に対する「性役割尺度」作成の試み—SD法による性役割観の分析— 名古屋市立保育短期大学紀要, **20**, 9-26.
- Gough, H. G. 1957 *Manual for the California Psychological Inventory*. Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologists Press. CPI 研究会訳 CPI カリフォルニア人格検査, 誠信書房。
- Gump, J. P. 1972 Sex-role attitudes and psychological well-being. *Journal of Social Issues*, **28**, 79-92.
- Heilbrun, A. B. 1981 *Human sex-role behavior*. New York: Pergamon Press.
- 林 文俊 1978 相貌と性格の仮定された関連性(3)—漫画の登場人物を刺激材料として— 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 41-56.
- 林 文俊・津村俊充・大橋正夫 1977 顔写真による相貌特徴と性格特性の関連構造の分析 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **24**, 35-42.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, **15**, 193-202.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知Ⅱ 教育心理学研究, **20**, 48-59.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知Ⅲ 教育心理学研究, **22**, 205-215.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ, No.14.
- 久世敏雄・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美・石黒敬子 1977 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅲ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **24**, 67-83.
- 久世敏雄・浅野敬子・伊藤義美・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和 1978 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅳ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 119-129.
- 久世敏雄・後藤宗理・浅野敬子・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美 1980 中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究(Ⅱ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **27**, 65-83.
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society; From the standpoint of a social behaviorist*. Edited and with an introduction by Charles W. Morris. The University of Chicago Press. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野 収訳, 精神・自我・社会, 1973 青木書店。
- Mead, M. 1949 *Male and female: A study of the sexes in a changing world*. William Morrow & Co. 田中寿美子・加藤秀俊訳, 男性と女性(上・下), 1961, 東京創元社。
- 南 隆男・若林 満・西河正行・小林ポオル 1979 大学組織における学生の自我同一性確立過程—総合的継時分析にむけての覚え書き— 慶応義塾大学, 哲学, **71**, 97-162.
- 大橋正夫・長戸啓子・平林 進・吉田俊和・林 文俊・津村俊充・小川 浩 1976 相貌と性格の仮定された関連性(1)—対をなす刺激人物の評定値の比較

- による検討— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 23, 11—25.
- 大橋正夫・吉田俊和・鹿内啓子・平林 進・林 文俊・津村俊充・小川 浩 1977 相貌と性格の仮定された関連性 (2). 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 24, 23—33.
- 大橋正夫・平林 進・小川 浩・鹿内啓子・林 文俊・吉田俊和・津村俊充 1978 女子大学生における対人認知と対人関係に関する追跡的研究 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 57—78.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., and Tannenbaum, P. H. 1957 *The measurement of meaning*. Urbana, Ill.: University of Illinois Press.
- Parsons, T., and Bales, R. F. 1955 *Family, socialization, and interaction process*. Glencoe, Ill.: Free Press.
- Spence, J. L., Helmreich, R., and Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex-role attitudes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39.
- Super, D. E. 1957 *The psychology of careers*. New York: Harper. 日本職業訓練協会訳, 職業生活の心理学, 1960, 誠信書房.
- Super, D. E., and Bohn, M. J. 1970 *Occupational psychology*. Belmont, Calif.: Wadsworth Publishing Co. 藤本喜八ほか訳, 職業の心理, 1973, ダイアモンド社.
- Wakabayashi M. 1980 *Management career progress in a Japanese organization*. Ann Arbor, Michigan, UMI Research Press.
- Wakabayashi, M., Graen, G., Sano, K., Minami, T., and Hashimoto, M. 1977 Japanese private university as a socialization system for future leaders in business and industry. *International Journal of Intercultural Relations*, 1, 60-80.
- 若林 満 1981 キャリア形成とモチベーション. 西田耕三・若林 満・岡田和秀 編著「組織の行動科学」有斐閣.
- 山田洋子 1981 短大生の適応に関する研究—入学形態と精神的健康との関係. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 20, 39—55.

(1981年7月31日 受稿)

SOCIAL-ROLE ATTITUDES AND OCCUPATIONAL SELF-IMAGE FOR THE FEMALE

— Scales construction and comparative analyses —

Mitsuru WAKABAYASHI, Keiko SHIKANAI, and Motomichi GOTO

The present study is aimed at developing scales for evaluating the occupational self-image and social-role attitudes of the female. For constructing self-image scales, 31 adjective pairs were carefully selected by reviewing both the Masculinity-Feminity (M-F) and Humanity aspects related to sex-role studies, and the structural dimensions concerning person perception commonly known as Evaluation (E), Potency (P), and Activity (A). Adjective pairs selected were put into 7-point semantic differential scales, and subjects were asked to evaluate (1) the occupational self-image, and (2) their desired female image as co-workers on the job, by using these SD scales. Whereas, for the social-role attitudes, 31 statements with 7-point scales were presented to describe liberal as well as traditional ideas about female roles in the society, especially about family, occupational, and citizens' roles for the female.

Based on the total sample consisting of male and female college students ($n = 621$), full-time working women ($n = 570$), and the spouse of the married female workers ($n = 214$), factor analyses were performed for each instrument. Occupational self-image produced four factors, which articulated the M-F-H sex-role aspects and E.P.A. dimensions into separate but meaningful factors. The first *potency* factor was characterized by a set of adjective pairs pertaining to the M-F and P dimensions. Second, an *affinity* factor was found connecting the Humanity with E dimensions, while a combination of the Humanity and A dimensions produced an *outgoingness* factor. Finally, a *delicacy* factor was the product of combining the M-F with E dimensions. The above four-factor pattern of occupational self-image was found quite stable across different sample groups. Moreover, analyses for the desired female image yielded basically the same results as those for the self-image. Next, social-role attitudes were summarized into three factors. The first factor named *equality in social participation* indicated the necessity of equal involvement for the female in occupation, politics and other social role areas. The second factor addressed itself to *traditionalism of domestic functions* for the female, while the third factor was found describing *equality in the division of household labor*.

Items contributing to each factor were combined into a composite scale. Reliability estimates calculated based on Cronbach's alpha produced coefficients with satisfactory high levels. Then, in order to examine characteristics of scales constructed, they were subject to the correlational analysis for their interrelational patterns. Result of the analysis can be summarized as follows.

(1) Potency for occupational self-image showed significant correlations with the equality-social role attitude ($r = .17$ for working women and $r = .29$ for female students), while the affinity self-image tended to be associated with more strongly with traditionalism of female social roles. (2) Potency as a desired female image was found highly correlated with egalitarian attitudes toward female roles. On the other hand, affinity showed positive correlations not only with traditionalism, but also with egalitarianism. This posed some dilemma for the women's positions in the contemporary Japanese society. (3) Among working women, both the potency self-image and egalitarian social-role attitudes exhibited significant positive correlations ($r = .35$ and $r = .27$ respectively) with a measure of the quality of work experience, i.e., the level of experiencing worthwhile work on the job. This result implies a significant impact upon the potency self-image and egalitarian social-role attitudes for the female, deriving from the quality of their occupational lives that are determined primarily by the factors surrounding their work environments. (4) Comparison of means among 3 female groups (college students, the single, and the married workers) revealed that mean potency self-image and egalitarian social-role attitudes tended to be lowest for the single working women followed by the married women and college students. This finding suggests the loss of positive self-image and social-role attitudes occurring to most females in the process of their establishing as careered women after graduating from schools.